

上代の動詞語尾ス——「菜摘ます児」のス——

田 中 みどり

はじめに

- 一 スの接続
- 二 動作性動詞と状態性動詞
- 三 萬葉集の「所」字の用法
- 四 スを用いるものと用いないもの
- 五 上位者から下位者に対してスを用いている場合
- 六 自敬表現
- 七 菜摘ます児
- 八 スの意味
- 九 スの性格

キコス・オロスなど、オ段音に接する「ス」は敬語をあらわし、ア段音に接する「ス」は動作・作用が起ることを示す動詞語尾であった。すでに古事記の時代にもキコスとキカスとが同じ意味のものと認識されていた。日本書紀ではア段音に接する「ス」も敬語をあらわすものと考えられ、萬葉集では、「ス」は親愛をあらわしたり、語調を整えるものとして使用された。後に存続をあらわすようになった「リ」が、現存を明確に示したように、「ス」は動詞の動作性を明確にする語尾であった。

底本として

新編日本古典文学全集『古事記』（小学館 一九九七年。底本＝

真福寺本古事記 に校訂を加えたもの）

新編日本古典文学全集『日本書紀 ①②③』（小学館 一九九四

年、一九九六年、一九九八年。底本＝寛文九年版本日本書紀
に校訂を加えたもの）

新編日本古典文学全集『風土記』（小学館 一九九七年。底本＝

三条西家本、天理図書館善本叢書第一巻『古代史籍集』の播磨国風土記／永青文庫蔵、細川家本『出雲国風土記諸本集』

の出雲国風土記／時雨亭文庫本、冷泉家時雨亭叢書47『豊

後国風土記・公卿補任』の豊後国風土記／猪熊本の肥前国風

土記／茨城県立歴史館蔵、菅政友本『常陸国風土記四本集成』

の常陸国風土記／その他…逸文 に校訂を加えたもの）

岩波新日本古典文学大系『萬葉集 一・二・三・四』（一九九

年、二〇〇〇年、二〇〇二年、二〇〇三年。底本＝西本願寺

本万葉集 に校訂を加えたもの）

を用いる。ただし、訳文については、適宜、勘案する。

はじめに

萬葉集巻第一・1雄略天皇の歌に、

○…この岡に 菜摘ます兒（菜採須兒） 家告らな 名告らさ

ね（名告紗根）…

「萬葉 一 1」

「摘ます」「名告らさ」などのスがある。

このスは敬語の助動詞で、軽い敬意または親愛をあらわすものと考えるのが一般である。

しかしながら、たとえばこの歌では、

◇…上代では夫や親から妻や子へといった下向関係には敬語が用いられないのが普通であり、たとえ用いられても、それは挽歌の中においてであって、むしろ神への敬語の枠の中で考えられるべきものであった。

ところが、上世になると、親や夫から子や妻へ敬語を用いる例は珍しくなく、一般に若い女性への敬語が多くなっている。

…（堤中納言「はいずみ」）…のような例では、明らかに親が娘に敬語を用いているとしなければなるまい。…もつとも、右の例は相互使用的前提下にあるし、上代でも、万葉集開巻第一の歌で、雄略天皇が若菜を摘む少女に「このをかに 菜採須兒 なつます」と呼びかけられた例もあつたりするので…

辻村敏樹「敬語史の方法と問題」（20頁）

『講座国語史5 敬語史』（1971年 大修館書店）所収のように、天皇が少女に敬語を用いることが上代にはあつたという考えもある一方、天皇が一介の少女に敬語を使うのは疑問であるという理由から、この歌は雄略天皇の作ではなく、もともとは民謡であつたものであるとか、述作者から作中人物に対する敬語であつた、と説明する説もある。

これらの説では、全歌をおおむね物語の中の歌い手の言葉として解釈し、それにそぐわない歌のみ、合理的解釈を付すのである。諸注釈を見ると、このように、その時々によって説明の視点が動いているのが現状である。

記紀萬葉のスを見渡すと、「軽い敬意または親愛」と考えられるものもあり、「語調を整えることば」と考えられるものもある。結論から言えば、スは、時代によって用いられ方が異なっているのである。萬葉の時代のスは、おおむね親愛のことばであるか語調を整えることばであるが、古い時代のスは別の意味をもったことばであった。雄略天皇の歌とされる萬葉集卷第一・1「この岡に菜摘ます兒（葉採須兒）家告らな名告らさね（名告紗根）」や聖徳太子の歌とされている卷第三・415「家ならば妹が手まかむ草まくら旅に臥やせる（客尔臥有）この旅人あはれ」などのスは、古い時代のスの用法である。従来の説は、記紀萬葉を通して一義的に説明しようとしたことが問題であったのである。

また、その機能については動詞語尾とするもの（時代別国語大辞典上代編 岩波新日本古典文学大系『萬葉集』もあれば、助動詞とするもの（春日和男『古代の敬語』一九七一年 講座国語史5 敬語史）大修館 所収、土橋寛『古代歌謡集全注釈 古事記編』一九七二年 角川書店、日本国語大辞典第一版、新編日本古典文学全集『古事記』『日本書紀』『萬葉集』、『萬

集索引」塙書房、沢瀉久孝『萬葉集注釋』）もある。伊藤博『萬葉集釋注』は「動詞語尾（助動詞）」と両方を記している。そして、語源もアス説（土橋・マス説（春日）などがある。

スは何であつたのか、上代の用例を検討することによって、明らかにする。

一 スの接続

スは、古事記本文に2例・古事記本文訓注に2例・歌謡に44例、日本書紀本文訓注に2例・歌謡に35例、風土記歌謡に2例、萬葉集に一音一字表記のもの97例・「葉採須兒 ナツマスコ」のようにスの部分を表記するもの75例（さらに、「公之佩具之 キミガオバシシ」のようにスと訓み得るものの用例数107例）、存在する。

スは、四段活用動詞では、おおむねア段音（未然形）に接する形をとる。

が、オル（繼・オモフ（思）を承ける場合には、オロス・オモホスのように才段音に接する形をとる。

下二段活用のカク（懸・ササグ（捧）・ナツ（撫）・ヌ（寝）・ワスル（忘）を承ける場合にはカカス・ササガス・ナダス・ナス・ワスラスのようにア段音に接する形をとる。

サ変活用ス（為）はエ段音（未然形）を承ける。

上一段活用 of ミル (見・キル (着) を承ける場合にはメ
ス・ケスの形をとる。

萬葉集にあらわれるコヤス (臥) も、上二段活用動詞コ
ユ (臥…コイフス・コイマロフなどより考えられる動詞) にスが接したもの
と考えられる。

さらに、ヲス (食) もまた、ウ (居) の連用形斗にスが接
続したものか、という説がある。

キク (聞) にスが接したと考えられているものには、キ
カス・キコス両形がある。

風土記の例のうち、「ミス (見)」は、

○潮には 立たむと言へど 奈西の子が 八十島隠り わを見
さば知りし (和乎弥佐婆志理之) 「常陸国風土記香島の郡」

である。これは、中央の用法であれば、日本書紀にある

○…御諸が上に 登り立ち わが見せば (倭我弥細摩) :

〔紀 97 歌謡〕

のように「見せば」となるところであるが、常陸風土記の
用例であり、東国方言で「見さば」となっているものと考え
られている。ただ、日本書紀の「ミス (見)」も孤例で、
萬葉集では「メス (見)」である。

ケス (着) は着ル (上一段活用) にスが接したものと考えられ
るが、エ段音に接する。

いまひとつ、

○汝が言へせこそ (那賀伊幣勢許曾)

〔記 63 歌謡〕

○汝が言へせこそ (儼餓伊幣齊虚曾)

〔紀 57 歌謡〕

という変わった接続の例がある。上代に於いてイフは四段
活用動詞であるから、これは「言はせ」となるのが一般で
ある。逆行同化説 (日本古典文学全集) や「iti + asu → ifesu」
説 (土橋) があるが、筆者は逆行同化説を採用する。

また、「な恋ひきこし」 (記3 歌謡) のように、キコスが尊
敬をあらわす補助動詞となつてゐるものが古事記に1例あ
り、敬語の副詞「キコシ以チ」の接するものが、古事記に
「キコシ以チ食セ」1例、日本書紀に「キコシ以チ食セ」
1例ある。

萬葉集には、見ス・召スにタマフが接した見シタマフ、
また、思ホス・知ラスにメス・ヲスが接した思ホシメス・
知ラシメス、メス・ヲスに副詞キコシが接して接頭語とな
つたキコシメス・キコシヲス、などの例もあらわれる。

以上述べた、接続の異なつたものを、次に掲げる。

〔古事記歌謡〕

動詞

…言へス

織ロス

聞コス

(言う・考える、

着セリ、

捧ガ

セリ 寝ス

名詞

…ミケシ (御衣)

補助動詞 …キコス

副詞 …キコシ以テ

〔日本書紀歌謡〕

動詞 …言ヘス 聞コス（言う・考える）、見ス（みせば）、臥ヤセ

副詞 …キコシ以テ

〔風土記歌謡〕

動詞 …見ス（みさば）

〔萬葉集〕

動詞 …思ホス・思ホセリ 聞コス、着セリ・色着セリ 見ス・見サ

ク 見シアキラム、臥ヤス・臥ヤセリ、懸カス・懸カセリ

忘ラス 寝ス・寝セリ・サ寝ス、為ス

接頭辞 …キコシ（メス） キコシ（ラス）

補助動詞 …（思ホシ）メス （知ラシ）メス

名詞 …ミケシ（御衣）

上一段活用動詞キル（着）にスが接するときエ段音のケスに変化するありかたは、着ルが現存の語尾アリを分出するときにケリの形となること似ている。

また、萬葉集のコヤス（臥）はコイフス・コイマロブなどより考えられる上二段動詞コユにスが接したものと考えられるが、これは、古事記88歌謡

○隠り処の 泊瀬の山の 大峰には 幡張り立て さ小峰には 幡張り立て 大小よし 仲定める 思ひ妻あはれ 槻弓の 臥る臥りも（許夜流許夜理母） 梓弓 立てり立てりも（多弓理多弓理母） 後も取り見る 思ひ妻あはれ

〔記 88歌謡〕

に、「臥る臥りも」と「立てり立てりも」とが対になっているように、コユよりアリが分出するときにコヤリとなることと似ている。^①

次に、下二段自動詞のヌ（寝）にスが承接した場合、ナスのようにア段音になる。これは、ヌ（寝）の他動詞形がナスの形であることと関係するであろう（他の例：捧ガセリ・撫ダス・懸カス・懸カセリ・忘ラスは、他動詞形）。

キコスは、尊敬をあらわす補助動詞ともなる。（記3歌謡「な窓ひきこし」）

キコスは、尊敬をあらわす接頭辞ともなる。（キコシラス・キコシメス）

メスは、尊敬をあらわすことばであったが、後に、尊敬をあらわす補助動詞ともなる。

（キコス・キカス・キコシラス・キコシメス・シロシメスなどについては、拙稿「キコス・キカス キコシラス・キコシメス・シラシメス」〔京都語文〕202013年に述べた。）

寝す・見す・着す・メスなどは、これで一語となっている。このような語もあることから、スは助動詞ではなく、動詞語尾と考える。

また、上に挙げたように、萬葉集には、スを含む動詞に、

補助動詞が接するものがある。⁽²⁾タマフ17例・イマス1例・マス2例・メス20例、存在する。また、敬語の副詞

「キコシ以チ」の接するものが、古事記に「キコシ以チ食セ」1例、日本書紀に「キコシ以チ食セ」1例あり、敬語の接頭辞キコシが接するものに、萬葉集に「キコシヲス」6例、「キコシメス」2例ある。

このように、補助動詞が接したり、敬語の副詞や接頭辞が接したりするということは、スを含む動詞には敬語の意味がなかったということである。

一注

1 小学館新編日本古典文学全集『古事記』頭注(325頁、326頁)には、

「こやるこやりも」は「こやるこやるも」ないし「こやりこやりも」とあるべきもので、臥しながらも、の意か。「泣く泣く」「泣き泣き」のように終止形または連用形を反復すると副詞句となる。「たてりたてりも」は終止形の反復で、立っているがらもの意。なお「こやる」は「臥ゆ」の派生語、「たてり」は「立つ」に存続の「り」が付いたもの。

とある。「りハあり」は上代では現存をあらわす語尾(拙稿「り」に就いて」佛敎大学研究紀要 通卷六十四号、1980年。「こやり」「こやる」は、「たてり」と同じく、「臥ユ」より現存の「りハあり」を分出したもの。

拙稿「記紀風土記のツ・ヌ・リ・タリ・キ・ケリ」(『京都語文』21号)において、前項の「こやる」「たてり」は終止形、後項の「こやり」「たてり」は連用形(名詞に転成で、前項は「梶弓」「梓弓」の述語、後項はそこから自分と妻とが「横になっているとき」「立っているとき」という意を引き出したことばであることを述べた。

2 補助動詞の中には、他に、アソバスが補助動詞となったものも1例(萬葉集)存在する。

二 動作性動詞と状態性動詞

スは、おおむね動作性の動詞に接する。しかし、以下の6例は状態性の動詞に接する。

○：そこ故に せむすべ知れや 音のみも 名のみも絶えず
天地の いや遠長く 偲ひ行かむ 御名にかかせる(御名尔懸世流) 明日香川 万代までにはしきやし 我が大君の形見にここを [萬葉 二・ 196 柿本朝臣人麻呂]
○天離る 鄙に名かかす(比奈尔名可加須) 越の中 国内ことごと 山はしも しじにあれども 川はしも さはに行けども 統め神の うしはきいます 新川の その立山に… [萬葉十七・4000 大伴宿祢家持]

○天の原 振り放け見れば 大君の 御寿は長く 天足らしたり(天足有) [萬葉 二・ 147 倭大后]
○：いつしかも 日足らしまして(日足座而) 望月の たた

はしけむと 我が思ふ 皇子の命は…

〔萬葉十三・3324〕

○…天照らす（天照） 日女の命 一に云ふ、「さしあがる 日女の命」…

〔萬葉 二・167〕

○天照らす（安麻泥良須） 神の御代より…

〔萬葉十八・4125〕

196歌は「御名にゆかりのある（明日香川）」、4000歌は「鄙に名の聞こえた（越の国）」、147歌は「大空に満ち溢れている」、3324歌は「成長なさつて」、の意である。「御名にかかせる」にはりが、「天足らしたり」にはタリが接していることは、これらが状態性であることの補いである。

以下に、注釈書の説明を見る。

196歌

◇御名にかかせる―カカスは関連する意の下二段動詞カクの敬語形。

〔全集 萬葉集 ①〕

4000歌

◇名懸かす―「す」は「越」の国の神に対する尊敬語。

〔集成 萬葉集 五〕

◇鄙に名かかす―カカスは冠する意の下二段カクの敬語形。四一段動詞のそれと同じように下二段についてもナス（寝）・ナダス（撫）という敬語形がある。

〔全集 萬葉集 ④〕

◇「名かかす」は未詳の句であるが、「す」は山を領する神への敬語であろう。「御名にかかせる」（一九六）に似るが、それは皇女の名に関わる意で明日香川について言い、ことは異なる。名高くていらつしやる、と解しておく。この句が直下の「越の中」に掛かるとする代匠記などの説は採らない。構文上は九句隔てた「その立山」に掛かると解釈すべきである。「離れすぎる欠陥は作者も感じただからこそ、ソノタチャマとソノを補ひ強調して、離れながら響き合ふやうに工夫したのである」（「私注」）。

〔新大系 萬葉集 四〕

4000歌の「名かかす」について、新大系に「未詳の句」とある。これは、柿本人麻呂の196歌の「御名にかかせる」をもとにして、大伴家持が作ったことばであろう。家持は、これに限らず、人麻呂や憶良の歌に学んだ、そして、もとの意味とは少しずれた、ことばを使うことがある。例えば、

○…あしひきの 山のたをりに この見ゆる（許能見油流）

天の白雲…

〔萬葉十八・4122 大伴宿祢家持〕

○この見ゆる（許能美由流） 雲ほころびて との曇り 雨も

降らぬか 心足らひに

〔萬葉十八・4123 大伴宿祢家持〕

にある「この見ゆる」は、

○…天へ行かは 汝がまにまに 地ならば 大君います この照らす（許能提羅周） 日月の下は…

の「この照らす」に学んだものであろう。「この照らす日月」の「この」は「今（照っている日月）」の意と解することができ、^③「この見ゆる」（今見えている）の「この」は、いかにも唐突である。家持の用語には、このような特徴があるので、今の4000歌の「鄙に名かかす」も「御名にかかせる 明日香川」に学んで、意義を変じたものと考ええる。ただ、「御名にかかせる 明日香川」は「御名にゆかりのある 明日香川」であるのに対して、ここは「鄙に名かかす」となっていて、助詞を補うならば「鄙に名かかす」で、意味は「鄙に名高い」であらう。

「天離る 鄙に名かかす 越の中…統め神の うしはきいます 新川の その立山に」の「鄙に名かかす」が何について言われているのかは、集成では「越」として、「越の国の神に対する尊敬語」と言い、新大系では「その立山」として、「山を領する神への敬語であらう」と言う。

「立山」にかかるとするには、語が離れすぎている。『私注』（1970年 筑摩書房）は「離れすぎる缺陷は作者も感じたからこそ、ソノタチャマとソノを補ひ強調して、離れながらも響き合ふやうに工夫したのである」と言う。現代語でこのように（ソノ）表現すれば強調形となる。が、古くは、

○三諸の その山並に（三毛侶之 其山奈美尔） 児らが手を

「三諸にある連山」などにも使われている表現で、「AノソノB」の形でBはAが所有するもの、あるいは、BはAに所属するもの、をあらわすものである。^④したがって、「立山」は無理である。「越」は、当時の地方の国の中では大きな国であつたから、「天離る 鄙に名の聞こえた」がかかることになる。その場合、スを尊敬語と考えれば、「国の神」を登場させるほかはない。集成の解釈は、苦肉の策である。ここに、スが尊敬をあらわすものではないのではないか、という問題が生じる。

次に、

147歌

◇天足らしたり―足ラスは充滿する意足ルの敬語形。作者の目には天皇の生命力が見渡す限り天空に満ち満ちて見え、宝寿無限なること疑いなしと確信して言った。

〔全集『萬葉集 ①』〕

3324歌

◇日足らし―「日足る」は成長する、心身共に充足する意。

〔集成『萬葉集 四』〕

◇日足らしまして―ヒタルは生い育つ意。成人するのに必要な日数が充足することからいう。

〔全集『萬葉集 ③』〕

◇「日足らしまして」は、「日足る」の敬語。「日足る」は生育する意。他動詞「日足す」は養育する意。

〔新大系『萬葉集 三』〕

「日足らしまして」には、敬語の助動詞マスが接している。一に述べたように、スを含む語に敬語が接する例は、萬葉集で、

タマフ 15例 ∷ ラシタマハマシ1例・見シタマフ10例・召シタマフ 2例

マフ 2例

置カシタマヒて1例・聞カシタマヒて1例

イマス 1例 ∷ 立タシイマシて1例

マス 1例 ∷ 日足ラシマシて1例

があり、また、メスが補助動詞となっているものは、

思ホシメス 8例

知ラシメス 12例

アソバスが補助動詞となっているものは、

国見遊バス 1例

がある。また、接頭辞キコスが接するものは、

キコシラス 6例

キコシメス 2例

がある。

一にも述べたが、このように、スを含む語に敬語の助動詞・補助動詞や接頭辞が接することのあるのは、スが敬語をあらわすのではないからではないか。

次に、「あまてらす」「あまてらす」について。

○…天照らす（天照） 日女の命 一に云ふ、「さしあがる 日女の命」…

〔萬葉 二・167〕

◇天照らす日女の命 天照大神。「日女」は日の女神。

〔集成『萬葉集 一』〕

「天でらす」については、集成・全集・新大系に注がないので、訳をみる。

○天照らす（安麻泥良須） 神の御代より…

〔萬葉十八・4125〕

◎天照大神の治められた遠い神の御世から今までずっと

〔集成『萬葉集 五』〕

2例とも、この集成の解釈がもつとも妥当である。「あまてらす」「あまてらす」は「日」にかかることをもととして、「日女の命」にかかる枕詞であつたものが、全体で天照大神の意となるものである。萬葉集に「月…照る」2例、「月…照らす」3例・「日…照らす」1例・「日月…照らす」3例、「天照る月」3例、「天照るや…日」1例がある。「～や」の形の枕詞には、「あまてるや（天光夜）」十六・3886、「あまとぶや（阿麻等夫夜）」五・876、「おしてるや（於之弓流夜）」二十・4365、「さひづるや（佐比豆留夜）」十六・3886、「たらしや（多羅知斯夜）」五・886などがある。「あまとぶや」は「ひさかたの 天飛ぶ雲に（天飛雲尔）」十一・2

676、「おしてるや」は「難波の海おしてる（於之江流宮に）（二十・4361）、のような実質をもった動詞の例があり、「おしてるや」は「おしてる（於之江流）難波の国に」（二十・4360）、「さひづるや」は「さひづらふ（雜豆腐）漢女を据ゑて（七・1273）、「たらちしや」は「たらちし（垂乳為）母に抱かえ」（十六・3791）、「たらちしの（多良知子能）母が目見ずて」（五・887）、のような枕詞形がある。

「あまてるや」は十六・3886の歌の中にあり、同じ歌の中で「おしてるや」「さひづるや」などと同居しているのであるが、上にあげた異形から考えて、*「あまてる」*「あまてらふ」とも成り得るものであろう。天の光が遍く照らすことに「あまてらふ」のような継続形では不十分であるならば、照る作用（為）を明確にして「あまてらす」と言えばよいであらう。

二注

3 萬葉集卷第八・1555の歌に、

安貴王の歌一首

○秋立ちて 幾日もあらねば この寝ぬる（此宿流） 朝明の風は 手本寒しも

〔萬葉 八・1555〕

がある。訳は、

◎立秋から何日も経っていないのに、この寝床に吹く朝の風は

たもとに涼しい。

〔新大系『萬葉集 二』

◎立秋から 幾日もたたないのに 起き抜けの 夜明けの風は 手首にひんやりと冷たい

〔全集『萬葉集 ②』

で、全集の頭注に、

◇この寝ぬる―『古今集』神遊びの歌に「水茎の岡の屋形に妹と我と寝ての朝けの霜の降りほも」（二〇七二）がある。この歌の「この寝ぬる」とあるのも同じような情景と解する説がある。Cononenu 時間のことなどかまわないうで自由気ままに眠る。詩歌語（日葡辞書）とある。

この場合、「寝ぬる」は「朝明」にかかり、「夜寝て朝になった、まだ寝ている」状態をあらわす。そして、「この」は「寝ぬる朝明の」風」にかかるものである。

4 拙著『日本語のなりたち 歴史と構造』（ミネルヴァ書房 2003年 170頁・175頁）

三 萬葉集の「所」字の用法

漢語の「所」字が助字として用いられるのは、受身の場合と、下に来る用言を受けて体言化する場合とである。しかし、萬葉集の中の「所」字は、

受身形であることを表示する場合

○さ雄鹿の 朝伏す小野の 草若み 隠らひかねて 人に知らゆな（於人所知名）

〔萬葉 十・2267

秋の相聞〕

○伏越ゆ 行かましものを まもらふに うち濡らさえぬ (所打沾) 波数まずして [萬葉 七・1387 譬喩歌]

○…日の入る国に 任けらゆる (所遣) わが背の君を… [萬葉十九・4245]

○大和恋ひ 眠の寝らえぬに (寐之不所宿尔) 心なく この 州崎廻に 鶴鳴くべしや

[萬葉 一・71 忍坂部乙麻呂]

○我がゆゑに 言はれし妹は (所云妹) 高山の 峰の朝霧 過ぎにけむかも [萬葉十一・2455 寄物陳思]

自発形であることを表示する場合

○天の海に 雲の波立ち 月の船 星の林に 漕ぎ隠る見ゆ

(榜隠所見) [萬葉 七・1068 雜歌]

○長き夜を ひとりや寝むと 君が言へば 過ぎにし人の 思ほゆらくに (所念久尔)

[萬葉 三・463 大伴宿禰書持]

○真野の浦の 淀の繼橋 心ゆも 思へや妹が 夢にし見ゆる

(伊目尔之所見) [萬葉 四・490 吹矢刀自]

○夢にだに なにかも見えぬ 見ゆれども (雖所見) 吾かも 迷ふ 恋の繁きに [萬葉十一・2595 正述心緒]

可能形であることを表示する場合

○春されば 霞隠りて 見えざりし (不所見有師) 秋萩咲き ぬ 折りてかざさむ [萬葉 十・2105 秋の雜歌]

※動詞「燃ユ」連用形語尾

○…かぎろひの 心燃えつつ (心所燎管) 嘆き別れぬ

[萬葉 九・1804 挽歌]

という例がある。これは、「燃ゆ」の活用語尾が、自発・可能・受身の助動詞「ユ」と同じであるために、「もえつつ」と訓ませむがために「所」字を置いたものであろうと考える。

動詞の連体形の場合

○磯城島の 大和の国は 言霊の 助くる国ぞ (所佐国叙) ま幸くありこそ

[萬葉十三・3254 相聞 柿本人麻呂歌集歌曰]

動詞の終止形＋係助詞ヤの場合

○君が代も わが代も知るや (吾代毛所知哉) 岩代の 岡の 草根を いざ結びてな [萬葉 一・10 中皇命]

活用語の終止形 (詠嘆を含む) の場合

○あしひきの 山のしづくに 妹待つと われ立ち濡れぬ (吾立所沾) 山のしづくに

[萬葉 二・105 大津皇子]

「リハアリ」の連体形「ル」(ている)を表示する場合

○泊瀬の 斎楓が下に 隠したる妻 あかねさし 照れる月夜に (所光月夜廻) 人見てむかも

[萬葉十一・2363 旋頭歌]

「ル(リ)」が序詞を総括して下に懸かつていくことを表示する場合

○秋の田の 穂向きの寄れる（穂向之所依） 片寄りに 我は
物思ふ つれなきものを

〔萬葉 十・2247〕

「ス」と訓み得る場合

○伊勢の海ゆ 鳴き来る鶴の 音どろも 君がきこさば（君之
所聞者） 吾恋ひめやも

〔萬葉十一・2805 寄物陳思〕

○：松の下道ゆ 登らして 国見遊ばし（国見所遊） 九月の
しぐれの秋は： 〔萬葉十三・3324 挽歌〕

○泣沢の 神社に神酒据え 祈れども 我が大君は 高日知ら
しぬ（高日所知奴）

〔萬葉 二・202 柿本朝臣人麻呂〕

○：みあらかは 高知らさむと 神ながら 思ほすなへに（所
念奈戸二）： 〔萬葉 一・50 藤原宮の役民〕

がある。エ・ユ・ユル・ユレ・ラエ・ラユ・ル・レおよび
サ・シ・スである。

このように「ス」と訓み得るものを「所」字であらわして
いるものがあることに注意したい。受身・自発・可能をあ
らわす例もあるところから考えると、これらの「所」字は
尊敬をあらわすものと考えられる。ただし、「きこす」「思
ほす」など、才段音にスが接する形のものがあることに
も注意しておきたい。

四 スを用いるものと用いないもの

古事記2歌謡

○八千矛の 神の命は 八島国 妻娶きかねて（都麻々岐迦泥
弓） 遠々し 高志の国に 賢し女を 有りと聞かして（阿
理登岐迦志弓） 麗し女を 有るときこして（阿理登伎許志
弓） さ呼ばひに 有り立たし（阿理多々斯） 呼ばひに
有り通はせ（阿理迦用婆勢） 大刀が緒も いまだ解かずて
（伊麻陀登加受弓） 襲衣をも いまだ解かねば（伊麻陀登
加泥婆） 嬢子の 寝すや板戸を（那須夜伊多斗遠） 押そ
ぶらひ わが立たせれば（和何多々勢礼婆） 引こづらひ
わが立たせれば（和何多々勢礼婆） 青山に 鵲は鳴きぬ
さ野つ鳥 雉は響む 庭つ鳥 鶏は鳴く 心痛くも 鳴くな
る鳥か 此の鳥も 打ち止めこせね いしたふや 天馳使
事の 語り言も 此をば 〔記 2歌謡〕

は八千矛の神が高志の国の沼河比売に婚う話である。この
歌では、「聞かして」「きこして」「有り立たし」「有り通は
せ」「押そぶらひ」「わが立たせれば」「引こづらひ」「わが立
たせれば」などの八千矛の神の動作にスが用いられ、また、
「嬢子の 寝すや板戸を」と沼河比売の動作にスが用いら
れている。ところが、同じ歌の中で、「妻娶きかねて」「
「大刀が緒も いまだ解かずて」「襲衣をも いまだ解かね
ば」（いずれも八千矛の神の動作）にはスが用いられてい

ない。

このように、一首の中で、同一人物の動作に対して、スを用いて表現するものとスを用いずに表現するものとが混じっている例は、ほかにも見られることである。たとえば古事記4歌謡

○…泣かじとは 汝は言ふとも（那波伊布登母） やまとの一本薄 項傾し 汝が泣かさまく（那賀那加佐麻久） 朝天の霧に立たむぞ…

では、「言ふ」にスは用いられていず、「泣かさまく」にはスが用いられている。スが軽い敬意・親愛あるいは述作者や伝承者の敬意をあらわす語であるならば、一貫してスを用いてもよいのではないか。

また、尊敬の語があらわれる古事記42歌謡において、

○…すすくと わがいませばや（和賀伊麻勢婆夜）…と応神天皇が自分に敬語を用いて「いませばや」と言っているにもかかわらず、後半で、

○…斯もがと わが見し子ら（和賀美斯古良） 斯くもがとあが見し子に（阿賀美斯古迹）…

のように「見る」が敬語になっていない例がある。また、古事記96歌謡に、雄略天皇の動作について、

○み吉野の 小室が岳に 猪鹿待つと 誰そ 大前に奏す やすみしし わが大君の 猪鹿待つと 呉床に坐し（阿具良爾

伊麻志） 白栲の 袖着そなふ（蘇豆岐蘇那布） 手舂に

蛸搔き着き その蛸を 蜻蛉早昨ひ 斯くの如 名に負はむと そらみつ 倭の国を 蜻蛉島とふ

のように、「坐し」が尊敬であるにもかかわらず、「着そなふ」は尊敬になっていない例がある。古事記では尊敬の語は、ひとつの歌の中でかならずしも一貫して用いられるとは限らない。

ところが、古事記96歌謡と同じ内容を詠った歌である日本書紀75歌謡では、

○倭の 鳴武羅の岳に 鹿猪伏すと 誰かこの事 大前に奏す一本に、「大前に奏す」を以ちて「大君に奏す」に易ふ。 大君はそこを聞かして（賊拠鳴枳舸斯題） 玉纏の 胡床に立たし

（阿娑羅彌陀陀伺） 一本に、「立たし」を以ちて「坐し」に易ふ。倭文纏の 胡床に立たし（阿娑羅彌陀陀伺） 鹿猪待つと

わがいませば（倭我伊麻西摩） き猪待つと わが立たせば（倭我陀陀西摩） 手舂に 蛇搔きつきつ その蛇を 蜻蛉

早や囁ひ 昆虫も 大君にまつらふ 汝が形は 置かむ 蜻蛉島倭

のように、一貫してイマスないしスが用いられている。これは、スが敬語であるという従来の説であれば、古事記の不整合を日本書紀であらためたもの、ということになる。

（スを親愛ないし敬意ととらないならば、スのもともとの意味をあらわすと同時にシ・セで音調を整える役割ももつということにな

る。

しかし、古事記ではスを敬語と考えるには不整合である
ということとは、もともとスが敬語であつたのではない、と
いうことであろう。

五 上位者から下位者に対してスを用いている場合

スは敬語あるいは親愛をあらわす語であると言われる。
しかし、以下に掲げる歌においては、下位者に対してスが
用いられているため、少なくとも敬語であるとは認められ
ない。それゆえ、軽い敬語すなわち親愛をあらわすことば
であるという説も出てきたわけである。

〔古事記〕 9 歌謡・4 2 歌謡・5 2 歌謡・1 0 0 歌謡・1 0 2 歌謡

〔日本書紀〕 3 歌謡・7 歌謡・5 1 歌謡・6 2 歌謡・1 0 4 歌謡

〔萬葉集〕 卷一・1・卷三 4 1 5

萬葉一・1 歌と古事記 4 2 歌謡

○籠もよ み籠持ち ふくしもよ みぶくし持ち この岡に
菜摘ます児（菜採須児） 家告らな 名告らさね（名告紗
根） そらみつ 大和の国は おしなべて 吾こそ居れ し
きなべて 吾こそいませ 我こそば 告らめ 家をも名をも

〔萬葉 一・1 雄略天皇〕

○…すくすくと わがいませばや 木幡の道に 遇はしし嬢子
（阿波志斯哀登売）

…眉画き こに画き垂れ 遇はしし女（阿波志斯哀美那）…

は、その代表的なものである。

○沖方には 小船連らく 黒鞆の まさづ子我妹 国へ下らす

（玖迹幣玖陀良須）

〔記 5 2 歌謡〕

も同じ趣である。

○…前妻が 肴乞はさば（那許波佐婆） 立ち楓棧たちそぼの

実の無けくを こきし削ひゑね 後妻が 肴乞はさば（那許

婆佐婆） 敵紳いちさき 実の多けくを こきだ削ひゑね

ええしやごしや（此は、いのごふそ） ああしやごしや（此は、嘲

咲ふぞ）

○…前妻が 肴乞はさば（那居波佐麼） 立楓棧の 実の無け

くを こきしひゑね 後妻が 肴乞はさば（那居波佐麼）

標 実の多けくを こきだひゑね

〔紀 7 歌謡〕

は、古事記にあるように、「いのごふ」「嘲咲ふ」歌である
から、ごたいそうに親愛のスを用いたとも考えられる。

次に、日本書紀の、仁徳天皇と武内宿禰とのやりとりで、
天皇が

○たまきはる 内の朝臣 汝こそは 世の遠人 汝こそは 国

の長人 秋津島 倭の国に 雁産むと 汝は聞かすや（難波

企箇輪那）

〔紀 6 2 歌謡〕

と問うたのに対し、宿禰は

○やすみしし わが大君は 宜な宜な われを問はすな（和例

烏斗波輪儼） 秋津島 倭の国に 雁産むと われは聞かず

〔紀 63歌謡〕

と答える。天皇が宿禰に「汝は聞かずや」と問い、宿禰は「われを問はずな」と答え、互いにスを用いているのである。古事記では、天皇の歌は、

○たまきはる 内のあそ 汝こそは 世の長人 そらみつ 倭の国に 鴈卵生と聞くや（加理古牟登岐久夜）

〔記 71歌謡〕

「聞くや」となっていて、スは用いられていない。そして、宿禰の歌は、

○高光る 日の御子 諾しこそ 問ひ給へ（斗比多麻閉） 真こそに 問ひ給へ（斗比多麻閉） あれこそは 世の長人 そらみつ 倭の国に 鴈卵生と 未だ聞かず

〔記 72歌謡〕

で、書紀の「われを問はずな」が「諾しこそ 問ひ給へ 真こそに 問ひ給へ」になっている。古事記の場合、天皇は宿禰に敬語を使用せず、宿禰は天皇に「給ふ」という敬語を用いているのである。天皇と臣下との応答をあらわすものとして、古事記のほうが理解しやすいものであるが、日本書紀のほうは、スが敬語であるとすれば、天皇と長老とが、より親しみをもった問柄であるということになる。

次に、

○しなてゐる 片岡山に 飯に飢て 臥せる（許夜勢屢） その

田人あはれ：飯に飢て 臥せる（許夜勢屢） その田人あはれ

〔紀 104歌謡〕

は、聖徳太子が道に臥す飢者を視て歌った歌。聖徳太子が飢者にスを使っている。この飢者のことをちに聖徳太子が「必ず真人ひじりならむ」と言っているから、敬語を用いたとも考えられる。ただし、聖徳太子（伝承上）であれば、聖でなくとも、諸人を尊く扱うことはあるであろう。萬葉集の上宮聖徳太子の歌

上宮聖徳皇子出遊竹原井之時、見竜田山死人悲傷御作歌 一首

○家ならば 妹が手まかむ 草枕 旅に臥やせる（客尔臥有）
この旅人あはれ

〔萬葉 三・ 415〕

は、この日本書紀の歌と同じ伝承の歌であろう。

これらの歌の場合、従来いわれているように、スが親愛や敬意をあらわすと考ええることは可能である。しかしながら、次の歌のような場合はどうか。

日本書紀の

○天離る 夷つ女の い渡らす迫門（以和多邏素西渡） 石川

片淵 片淵に 網張り渡し 目ろ寄しに 寄し寄り来ね 石川片淵

〔紀 3歌謡〕

について、『古代歌謡全注釈 日本書紀編』は、この歌は、

もと民謡であつたものと言う。土橋説では、スはおおむね物語述作者の敬語とするのであるが、ここは親愛としている。

◇スは元来敬語の助動詞であるが、ここは親愛の気持ちを表わす。(21頁)

だが、民謡の生み出される地において、自らの地を「天離る 鄙」と言うことは無い。「天離る 鄙つ女」という視点は都の者の視点である。民謡をもとにした、ということにはあつたかもしれないが、少なくとも、都の者による補筆はおこなわれているであろう。動作主体はあくまでも「天離る 鄙つ女」である。「天離る 鄙」は鄙を見下げた言い方である。その「天離る 鄙」の女に対して敬語ないし親愛のことはを用いるであらうか。また、この歌を歌つた喪につどう者あるいは下照媛にしても、「鄙つ女」に親愛の情をかけるいわれはない。このスは、物語述作者の鄙つ女への敬語でもなく、伝承者の敬意でもなく、歌つた人の鄙つ女への親愛でもない。

この歌は、

○天なるや 弟織女の 頸がせる 玉の御統の あな玉はや
み谷 二渡らす 味相高彦根 [紀 2 歌謡]

とともに歌われている。新編日本古典文学全集『日本書紀①』には、3 歌謡の「い渡らす」の注に、

◇イは接頭語。スは尊敬。

とし、歌のあとの「此両首歌辞今号夷曲。」の「両首歌辞ふたうた」の注に、

◇本来、二首一組として原資料にあつたものであろう。二番と三番とは、天界と地上の遠国、弟織女と鄙つ女と相対的で、「二渡らす」「い渡らす」と同類語が用いられ、リフレイン法も類似する。

と言う。この説明で、ふたつの歌が歌われた意味は、ややわかりやすくなる。ただ、「い渡らす」の部分は、あいかわらず疑問である。ところで、日本書紀24 歌謡に、時の人がうたった、

○朝霜の 御木みけのさ小橋をばし 群臣まへつきみ い渡らすも
(伊和哆羅秀暮) 御木のさ小橋 [紀 24 歌謡]

がある。この「い渡らす」の注にも、

◇イは接頭語。スは尊敬の助動詞。

とある。この場合は、「い渡らす」の스가「群臣まへつきみ」への敬語であるとみえることは可能である。しかし、「天離る 夷つ女」と「い渡らす」とを並べると、スが敬語であると考えことは難しい。

また、古事記で、豊樂の日に、三重の采女が雄略天皇に大御酒を献つた時、盃に木の葉が落ち、天皇を激怒させる。それに対して三重の采女が歌つた歌に免じて、采女は罪を

赦された。時に、雄略天皇の太后の歌った

○倭の 此の高市に 小高る 市の高処 新嘗屋に 生ひ立て
る 葉広 斎つ真椿 其が葉の 広り坐し 其の花の 照り
坐す 高光る 日の御子に 豊御酒 献らせ (多呂麻都良
勢) 事の 語り言も 是をば [記100歌謡]

では、采女の行為にスが用いられている。ここでも、99
歌謡・100歌謡・101歌謡の後に、「此三歌者、天語
歌也。」とあり、もとは海人駆使の歌った歌と考えられて
いる。また、同じ豊樂の日に、春日の袁杼比売が大御酒を
献った時に雄略天皇が歌った歌

○水灌く 臣の嬢子 秀罽取らすも (本陀理登良須母) 秀罽
取り 堅く取らせ (加多久斗良勢) 確堅く 弥堅く取らせ
(夜賀多久斗良勢) 秀罽取らす子 (本陀理斗良須古)

[記102歌謡]

でも、臣の嬢子の行為にスが用いられており、歌の後に
「此者、志都歌也。」とある。記102歌と類似の歌が琴
歌譜にもあり、

○水灌く 臣の少女 秀罽執り (保陀理刀利) 一説に云ふ「
らさね」 下堅く 弥堅く執れ 秀罽執らす子 (保太利刀良須
古) 「琴歌譜」 蓋歌うきうた 大系本「古代歌謡集」

宮廷の歌人によって歌われた歌と考えられている。そのよ
うな伝承歌を物語の中に取り入れているわけで、そこに用

いられた「ス」を、『古代歌謡全注釈 古事記編』では、
自称敬語としているわけである(351頁、366頁)。

しかし、日本書紀で、仁徳天皇が天津で皇后の船を待つ
て歌った歌

○難波人 鈴船取らせ (須儒赴泥苔羅齊) 腰なづみ その船
取らせ (曾能赴尼苔羅齊) 大御船取れ (於朋瀾赴泥苔礼)

[紀 51歌謡]

ここでは天皇が船人に対して敬語を用いていることになる。
ただ、第五句では「取れ」となっていることに注意したい。
これは、「取らせ」であつても「取れ」であつても、同じ
意味をあらわすものであるのではないか。すなわち、スに
は敬語の意味があつたのではなく、動詞がそのものの自身
の中にもつている、動作・作用などの意味にかかわるもので
あつたのではないか。

キカスとキコスについて

キカスとキコスとは、ともに「聞く」をもとにしてでき
た語であると考えられている。音韻交替の説があるが、キ
カスは「聞く」の意であり、キコスは記紀では「思う・考
える」の意、萬葉集では「言う」の意となる。これについ
ては、拙稿「キコス・キカス キコシヲス・キコシメス・

シラシメス」(『京都語文』20 2013年)に述べたとおり、キ

コスは聴コス・キカスは聞カスで、スが才段音に接してキ
コスとなったものは尊敬の意の補助動詞となることもあり、
キコシラス・キコシメスのような尊敬の意の接頭辞ともな
る。

動詞にスが接するとき、才段音に接するものは、ほかに
古事記にオロス(織・萬葉集にオモホス思)がある。

オロスは、仁徳天皇が庶妹女鳥王を乞い給うた時の歌に
出てくる。

○女鳥の わが王の 織ろす服(淤呂須波多) 誰が料ろかも

[記 66歌謡]

○高行くや 速総別の 御襲衣料

[記 67歌謡]

ここの記述は、日本書紀では、雌鳥皇女の織縑女人等(き
ぬおりめども)の歌として、

○ひさかたの 天金機 雌鳥が 織る金機(於瑠箇儺麼多)

隼別の 御襲料

[紀 59歌謡]

のようになる。全く同じ歌ではないが、古事記のオロスは
日本書紀ではオルになっている。

ところで、古事記2歌謡の、

○八千矛の 神の命は::賢し女を 有りと聞かして(阿理登岐
迦志弓) 麗し女を 有るときこして(阿理登伎許志弓)::

[記 2歌謡]

ではキカス・キコスふたつの語が使われているのに対し、
この歌とよく似た日本書紀96歌謡では

○八洲国 妻枕きかねて 春日の 春日の国に 麗し女を 有
りと聞きて(阿喇等枳枳底) 宜し女を 有りと聞きて(阿
喇等枳枳底)::

[紀 96歌謡]

のように、二個ともキクが使われている。キカス(聞く)
は萬葉集にもあらわれるから、その時代にも生きた語であ
った。が、オロス・キコス(思う、判断する)のような語
は、古い伝承を伝えた古事記には残ったが、日本書紀の時
代には既に用いられていない語であったから、取り下げら
れたと考える。

キコスとラス・メスが結びついたキコシラス・キコシメ
スが尊敬の意をあらわすことになったのは、キコスが尊敬
をあらわしたからであろう。それと同じように、オロス・
オモホスのスも〈尊敬〉をあらわすものであったろう。そ
れでは、もうひとつのキカスのスは何であろうか。これも、
上の日本書紀51歌謡と同じく、スは敬語の意味があった
のではなく、動詞がそのものの自身の中にもつている、動
作・作用などの意味にかかわるものであったのではないか。
仁徳天皇と武内宿禰とのやりとりも、敬語表現ではなく、
「聞いているか」「お問いになるな」ということであろう。

「お問いになるな」と敬語で訳したが、これは文脈上、動詞に含まれたものと見る。）

六 自敬表現

記紀には、自敬表現と考えられているものがある。

〔古事記〕

2 歌謡・28 歌謡・99 歌謡

〔日本書紀〕

1000 歌謡

ケス

ケス

〔古事記〕 27 歌謡・28 歌謡

〔萬葉集〕 514

ミケシ

〔古事記〕 4 歌謡

〔萬葉集〕 3350・20065

イロゲス〔萬葉集〕 3875

ケスは古事記に2例、および名詞のミケシが2例ある。
日本書紀には用例なし。

○…汝が着せる〔那賀祈勢流〕

襲の裾に 月立ちにけり

〔記〕 27 歌謡

○…わが着せる〔和賀祈勢流〕

襲の裾に 月立たなむよ

〔記〕 28 歌謡

○ぬばたまの 黒き御衣〔美祈斯〕を ま具に 取り装ひ…

…鳩鳥の 青き御衣〔美祈斯〕を ま具に 取り装ひ…

〔記〕 4 歌謡

萬葉集にはケス1例、名詞のミケシが2例ある。

○吾が背子が 着せる衣の〔蓋世流衣之〕 針目落ちず こも
りにけらし 我が心さへ

〔萬葉 四・514 阿倍女郎〕

○筑波嶺の 新桑繭の 衣はあれど 君が御衣し〔伎美我美家
思志〕 あやに着欲しも

〔萬葉十四・3350 東歌〕

○足玉も 手玉もゆらに 織る服を 君が御衣に〔公之御衣
尔〕 縫ひあへむかも

〔萬葉 十・20065 七夕〕

ミケシは「着物」の意、ケスは「身に着ける」の意である。
さらに、萬葉集には、イロゲス1例がある。

○…少なきよ 道に逢はさば 色着せる〔伊呂雅世流〕 菅笠

小笠 吾がうなげる 玉の七つ緒 取り替へも 申さむもの
を 少なき 道に逢はぬかも

〔萬葉十六・3875〕

古事記の、倭健命が美夜受比売とかわした歌に、

○…汝が着せる〔那賀祈勢流〕 襲の裾に 月立ちにけり

〔記〕 27 歌謡

○…わが着せる〔和賀祈勢流〕 襲の裾に 月立たなむよ

〔記〕 28 歌謡

がある。

従来の敬語や親愛ないし軽い敬意説では、美夜受比売の
「わが着せる」は自敬表現とする。全集『古事記』は

◎〔27 歌謡〕あなたが着ていらっしゃる襲衣の裾に、月が出

てしまった。：

◎ (28 歌謡) 私の着る襲衣の裾に月が立たないことがありま
しょうか。：

と訳すのみで、ケスについての説明はない。27 歌謡では
「あなたが着ていらつしやる」と敬語になっているのであ
るが、28 歌謡では「私の着る」と敬語にはなっていない。
『古代歌謡全註釈 古事記編』では、語釈に、

◇ (27 歌謡) 汝が着せる ケセルは、「着る」の敬語「着
(ケス)」の已然形に、完了の助動詞りの連体
形が接続したもの。あなたがお召しになつてい
る、の意。

◇ (28 歌謡) 我が着せる 倭建命の歌の「汝が着せる」を受
けた言葉。ケスは敬語であるから、ここは自称
敬語になる。自称敬語については「我が立たせ
れば」(記2)の「語釈」参照。

と言う。土橋の説は、ひとつひとつを見れば理に適ってい
るように見えるのであるが、都合によつて説明が変わるこ
とが問題であり、とりわけこの27 歌謡・28 歌謡の場合
には、倭建命と美夜受比売とのやりとりの中で、一方は敬
語であり、今一方は自称敬語であるということが論理に破
綻をきたしている。

ところで、萬葉集にイロゲス1例がある。

○琴酒を 押垂小野ゆ 出づる水 ぬるくは出でず 寒水の
心もけやに 思ほゆる 音の少なき 道に逢はぬかも 少な
きよ 道に逢はさば(道尔相佐婆) 色着せる(伊呂雅世
流) 菅笠小笠 吾がうなげる 玉の七つ緒 取り替へも
申さむものを 少なき 道に逢はぬかも

〔萬葉十六・3875〕

これは、

◎押垂小野から湧き出る水は生ぬるいものではない。その冷た
い水のように際立って思われる静かな人に、道で出逢わな
いだろうか。静かな人に道で出逢ったならば、色のついた菅笠
の小笠とわたくしの首にかけた七つ緒の玉とを、取り替え申
したいものを。静かな人と道で出逢わないだろうか。

というものである。「音の少なき」は、「人声の少ない
(道)」(新潮日本古典集成「萬葉集 四」)や「人音の少ない(道)」
(岩波新日本古典文学大系「萬葉集 四」)、「物音の少ない(道)」(新編
日本古典文学全集「萬葉集④」)、「人音、人音の少い」(萬葉集注釈、
「人気の少ない」(萬葉集歌註)などの解釈もあるが、「道」を
修飾することではなく、「音の少ない人」の意と考える。
「少なきよ 道に逢はさば」の部分で、「少なき」に「よ」
が加わっていることも、「少なき」が「道」を修飾するも
のではなく、独立した体言である可能性を示唆する。

イロゲセルについては、

◇「色げせる―色どったの意か。」 [集成『萬葉集 四』]

◇「色着せる―きれいな色合にかぶつていらつしやる、の意か。」

[全集『萬葉集 ④』]

◇「色着せる」は、彩色していることを言うか。

[新大系『萬葉集 四』]

などの注があり、「色着せる 菅笠小笠」の訳は、集成では「お冠りの色つきの菅の小笠」、大系では「色どりした菅笠の小笠」、全集では「色美しい 君の菅の小笠」、萬葉集釈註「色づきの菅小笠」としている。集成が「お冠り」としたところに敬語性は見られるものの、イロゲセルの訳は「色つきの」であつて、「色をおつけになつてゐる」のように、ヒトの動作に敬意を払つてゐるのではない。萬葉集注釈などは、イロを相手の愛称とする。しかし、ケスのケ「雅」が濁音になつてゐるのはイロゲスが複合語であることを示しているため、イロは「色」と考えるほかはない。ケスが成立した上で、イロと複合したものが、このイロゲスであると考えられ、*イロキル（色着る）は考えられない。「いろげせる」は「彩色してある」の義となり、敬語性はない。イロゲスは、「色を着ける」という動作をあらわすものであり、そして、この「ケス」は、「着ける」の義であらう。

イロゲセルのルは現在のありさま（今／＼している）をあ

らわし、スは動作性を明らかにする動詞語尾である。「色着せる」とは、「色が着けてある」ということである。古事記27歌謡・28歌謡の「着せる襲」、萬葉集514歌の「着せる衣」の場合も含めて、「着セル」は「装着している」、「着ス」は「装着する」である。

「着ル」は装着する動作そのものにも使うことができ、装着している状態にも使える動詞である。「着ル」のみならず、動作性動詞の現在形は、普遍・恒時にわたる。その動詞を、〈現在の動作〉に限定するはたらきをもっているのが、このスである。ちょうど、存在詞アリが現存をあらわしたと同じように、動詞語尾スは現在の動作性をあらわしているのである。

【ミケシ・ミトラシ・ミタタシノ・ミタタシス】

ミトラシノ2例

○やすみしし 我が大君の 朝には 取り撫でたまひ 夕には
い寄り立たしし みとらしの（御執乃） 梓の弓の なか弭
の 音すなり 朝狩に 今立たすらし 夕狩に 今立たすらし
し みとらしの（御執能） 梓の弓の なか弭の 音すなり

〔萬葉 一・ 3 雑歌〕

ミハカシヲ1例

○み佩かしを（御佩乎） 劍の池の 蓮葉に…

ミタタシ4例 …… 萬葉 卷二178・180・181・188

ミタタシス1例 …… 萬葉 卷五869

ケスがもとなつてできた語のミケシは、上述のことより、もともとは「今装着している着物」の意であつたのであるが、古事記・萬葉集の例ともに単に「着物」の意になつてゐる。敬語になるのは、接頭辞ミによる。（ミに敬意があるのであつて、シにはない）

ミケシ（御衣）と同じく名詞形のものは、萬葉集にミトラシ（御執）・ミタタシ（御立）があり、動詞ミタタシス（御立為）、枕詞のミハカシヲ（御佩）なども存在する。いずれもミがついてゐることで敬語となるものである。ミトラシノ（弓）の語義は「今、装着しておられる（弓）」であり、ミハカシヲは劍を佩くことからツルギにかかる枕詞と成つてゐる。

ミタタシ・ミタタシスについては以下のタタスの項に述べる

タタス

タタスは、

〔古事記〕

本文

本文訓注

タタス1例・ソリタタス1例
タタス1例

歌謡

〔日本書紀〕 本文訓注

歌謡

〔萬葉集〕

アリタタス1例・タタス2例・イハタタス1例
タタス1例
イデタタス1例・タタス5例・イハタタス1例
タタス14例・タタセリ3例・アリタタス1例・
イタタス1例・タタシイマス1例・
ヨリタタス1例・イヨリタタス1例、
ミタタシ4例、ミタタシス1例

存在する。

記紀のタタスについて

古事記本文および訓注にタタス2例・ソリタタス1例、アソバス1例、日本書紀本文訓注にタタス1例、ミハカシ1例の斯がある。

アソバスは仲哀記に、

○建内宿禰大臣白、恐。我天皇、猶阿蘇婆勢其大御琴。自阿至勢以音。

建内宿禰大臣（たけうちのおほおみ）が白ししく、「恐（かしこ）し。我（わ）が天皇、猶（なほ）其の大御琴（おほみこと）をあそばせ」とまをしき。

〔全集〕『古事記』242頁・244頁

とあり、琴を「弾く」の意で用いられてゐる。また、ミハカシは景行紀に、

○於是其国有佳人。曰御刀媛。御刀、此云弥波迦志。

是（ここ）に、其の国に佳人（かほよきをみな）有（あ）り。御刀媛（みはかしひめ）と曰（い）ふ。御刀、此（こ）には弥波迦志（みはかし）と云ふ。

〔全集『日本書紀 ①』356頁、357頁〕

とあり、名詞形（人名）である。この2例以外の他の動詞は、すべてタタスおよび複合語ソリタタスである。

そして、スおよび複合語ソリタタスは、すべて「天の浮橋」に関する場面にあられる。これは、何か特殊な動作なのではないだろうか。

そこでまず、記紀萬葉のタツ・タタスを見る。

【記紀のタツ】

古事記歌謡のタツの用例は24例

雲・霧（1・4・20・32）

木（51・57・57・64・74・99・100）

幡・弓（89・89・89） 月（27・28）

人（16・24・80・107・108） 国見（53・76）

このうち、人が立つものは、

○かつがつも 弥前立てる（伊夜佐岐陀弓流） 兄をし娶かむ

〔記 16歌謡〕

○さねさし 相模の小野に 燃ゆる火の 火中に立ちて（本那迦逐多知弓） 問ひし君はも

〔記 24歌謡〕

○…金門蔭 斯く寄り来ね 雨立ち止めむ（阿米多知夜米牟）

〔記 80歌謡〕
○…八重の柴垣 入り立たずあり（伊理多々受阿理）

〔記 107歌謡〕

○潮瀬の 波折りを見れば 遊び来る 鮪が端手に 妻立てり見ゆ（都麻多弓理美由）

〔記 108歌謡〕

国見2例（53・76）

○…出で立ちて（伊伝多知弓） わが国見れば…

〔記 53歌謡〕

○波瀬布坂 わが立ち見れば（和賀多知美礼婆） かぎろひの燃ゆる家群 妻が家の辺

〔記 76歌謡〕

「出で立ちて わが国見れば」（53）は、「わが立ち見れば」（76）と同じく、「立ちて見る」でひとつの概念をあらわし、国見を言うものである。この場合、「立つ」には儀礼としての意味がある。

日本書紀歌謡14例

雲（1・20・116） 木（41・43・53） 山（77）

人（72・72・87・89・100・108） 言明（46）

このうち人が立つものは、

○…斯く立ち寄らね（訶区多智予羅泥） 雨立ち止めむ（阿梅多知夜梅牟）

〔記 72歌謡〕

○潮瀬の 波折を見れば 泳び来る 鮪が鰭手に 妻立てり見ゆ（都摩陀氏理弥喻）

〔記 87歌謡〕

○大太刀を たれはき立ちて (多黎播枳多微氏) 抜かずとも
未果しても 会はむとぞ思ふ [紀 89 歌謡]

○韓国の 城の上に立ちて (基能陪備陀致底) 大葉子は 領
巾振らすも 日本へ向きて [紀 100 歌謡]

○向つ峰に 立てる夫らが (陀底屢制羅我) 柔手こそ わが
手を取らめ… [紀 108 歌謡]

「立つ」の核の意味は、垂直運動ないし、その状態で静止すること、にある。また、「立ちて見る」の「立つ」には、儀礼としての意味がある。

【記紀歌謡のタタス】

古事記歌謡のタタスの例は3例、石立タス1例で、

①立つ

○…押そぶらひ わが立たせれば (和何多々勢礼婆) 引こづ
らひ わが立たせれば (和何多々勢礼婆) [記 2 歌謡]

②出発する

○…さ呼ばひに 有り立たし (阿理多々斯) 呼ばひに 有り
通はせ… [記 2 歌謡]

③枕詞

○…酒の司 常世に坐す 石立たす (伊波多々須) 少御神の
… [記 39 歌謡]

日本書紀歌謡のタタスの例は5例、出デ立タス1例、石立タス1例で、

①立つ

○臣の子は 袴の袴を 七重をし 庭に立たして (備播備陀陀
始諦) 足結撫だすも [紀 74 歌謡]

○韓国の 城の上に立たし (基能陪備陀陀志) 大葉子は 領
巾振らす見ゆ 難波へ向きて [紀 101 歌謡]

②座に就く

○…大君は そこを聞かして 玉纏の 呉床に立たし (阿娘羅
備陀陀伺) 一本に、「立たし」を以ちて「坐し」に易ふ 倭文纏の
呉床に立たし (阿娘羅備陀陀伺) 鹿猪待つと わがいませ
ば さ猪待つと わが立たせば (倭我陀陀西麼) … [紀 75 歌謡]

「呉床に立つ」は「*呉床の上に立つ」のでもなく、「呉床の前に立つ」という姿勢で、狩の陣頭指揮をしているものである。

③天皇が (人日の) 行事として外に立つ

○やすみしし わが大君の 隠ります 天の八十蔭 出で立た
す (異泥多多須) みそらを見れば… [紀 102 歌謡]

※「出で立たす」は「隠ります」の対

④枕詞

○…神酒の司 常世に坐す いはたたす (伊破多多須) 少御神の… [紀 32 歌謡]

タツには、記に「立ちて見る」「出で立ちて」で国見の意をあらわすものがあつた(記53・76)。タタスにも、「出で立たす」の形で「天皇が行事として外に立つ」の意のものがあることに注意したい。これは儀礼的な行動である。

【萬葉集のタツ・タタス】

萬葉集では、タツという語は、

①雲・霧・霞・かぎろひ・虹・風・波など自然現象が起る、煙がおこる

○君が行く 海辺の宿に 霧立たば (奇里多々婆) あが立ち 嘆く 息と知りませ [萬葉十五・3580]

②月が出る

○朝月日 向かひの山に 月立てり見ゆ (月立所見) 遠妻を 持てらむ人し 見つつ偲はむ

[萬葉七・1294 旋頭歌]

③季節・時が到来する

○ひさかたの 天の香具山 この夕 霞たなびく 春立つらし も (春立下) [萬葉十・1812 春の雜歌]

④鳥が飛び立つ

○…国原は 煙立ち立つ 海原は かまめ立ち立つ (加万目立多都) … [萬葉 一・2 雜歌]

⑤出発する

○都辺に 立つ日近づく (多都日知可豆久) 飽くまでに 相見て行かな 恋ふる日多けむ [萬葉十七・3999 大伴宿禰家持]

⑥音がする

○堀江漕ぐ 伊豆手の舟の 梶つくめ 音しば立ちぬ (於等之婆多知奴) 水脈速みかも [萬葉二十・4460 大伴宿禰家持]

⑦評判になる

○今しはし 名の惜しけくも 吾はなし 妹によりては 千度立つとも (千遍立十方) [萬葉 四・732 大伴宿禰家持]

⑧木が生えている

○み吉野の 真木立つ山に (真木立山尔) 青く生ふる 山菅の根の… [萬葉十三・3291 相聞]

⑨人が身を起こす

○…吾が背子が 行きのまにまに 追はむとは 千度思へど たわやめの 吾が身にしあれば 道守の 問はむ答へを 言ひ遣らむ すべを知らにと 立ちてつまづく [萬葉 四・543 笠朝臣金村]

⑩立つ (継続)

○わが背子を 大和へ遣ると さ夜ふけて 曉露に 吾が立ち濡れし (吾立所露之) [萬葉 二・105 大伯皇女]

※⑨「身を起こす」と⑩「立つ(継続)」とは、一般の辞書ではひとつにくくって解説されている。今、ふたつに分けたのは、動作としての「立つ」と状態としての「立つ」とを区別するためである。

⑪立ちて見る(国見)

○香具山と 耳成山と あひし時 立ちて見に來し 印南国原

[萬葉 一・14 中大兄三山歌]

この「立ちて見に來し」を「立ち上がって見に來た」と訳する(新日本古典文学大系)のが一般であるが、これも古事記53歌謡「…出で立ちて(伊伝多知弓)わが国見れば」の「立ちて見る」に同じく、国見を言うものであって、「出立して国見をしよう」と來た」である。

⑫催す

「鵜川立つ」の用例が3例(十七・3991、十七・4023、十九・4191)、「鵜川を立つ」1例(二・38)ある。なお、この「鵜川立つ」には「鵜川立たす」

の形のものがある。

○…行き沿ふ 川の神も 大御食に 仕へ奉ると 上つ瀬に 鵜川を立ち(鵜川乎立) 下つ瀬に 小網さし渡す 山川も

依りて仕ふる 神の御代かも

[萬葉 一・38 柿本人麻呂]

これを新大系『萬葉集 一』は「鵜使いが鵜川をするために川に立ち」と解釈する(41頁)が、全集『萬葉集 ①』の「鵜川・狩に用いた四段立つは催す意」の解釈(48頁)がよい(ただし、狩の場合は、下(二・49)に述べるように、「出立する」の意である)。

タタスは萬葉集では(言 タタセリ・アリタタス・イタタセリ)、

①「立つ(継続)」意のもの7例

○松浦なる 玉島川に 鮎釣ると 立たせる児らが(多々世流古良何) 家路知らずも [萬葉 五・856]

②「催す」意のもの1例

○叔羅川 瀬を尋ねつつ 我が背子は 鵜川立たたさね(宇可波多々佐祢) 心なぐさに [萬葉十九・4190 大伴宿祢家持]

4例

③「(国見あるいは行事の儀礼として)立つ」意のもの

○高円の 野の上の宮は 荒れにけり 立たしし君の(多々志々伎美能) 御代遠そけば [萬葉二十・4506 大伴宿祢家持]

④「(御輿が) 出発する」意のものが1例

○…白たへに 舍人よそひて 和束山 御輿立たして (御輿立之而) ひさかたの 天知らしぬれ…

〔萬葉 三・475 大伴宿称家持〕

⑤「(狩に) 出発する」意のものが7例

○日並の 皇子の尊の 馬並めて み狩立たしし (御獨立師斯) 時は来向かふ

〔萬葉 一・49 柿本朝臣人麻呂〕

一・49の「み狩立たしし 時は来向かふ」を全集『萬葉集 一』は「狩を催された、その季節がいよいよ来た」と訳すのであるが、

○…朝廷に 今立たすらし (今立須良思) 夕狩に 今立たすらし (今他田渚良之) … 〔萬葉 一・3 中皇命〕

と同じく、「狩に発つ」意であると考ええる。

○東の 野にかぎろひの 立つ見えて かへり見すれば 月かたぶきぬ 〔萬葉 一・48〕

を承けて、「狩に発つた、まさにその時が来た」というクライマックスを演出するものである。

なお、

○ますらはは み狩に立たし (御獨立之) 娘子らは 赤裳裾引く 清き浜びを 〔萬葉 六・1001 山部赤人〕

では、「み狩に立たし」と「赤裳裾引く」とが対になっている。この場合にも、スの用いられているものと用いられていないものが対になっており、スが尊敬語ではないことが考えられる。

萬葉のタツとタタスとをくらべると、タタスには「人が立つ」「鶺鴒を催す」意のものもあるが、「(天皇が行事の儀礼として) 立つ」「出発する」など、へある動作に就く意味のものが見られる。

【天の浮橋にタタス】

古事記本文にタタス1例・ソリタタス1例、訓注にタタス1例。日本書紀本文訓注にタタス1例ある。

古事記の伊邪那岐命、伊邪那美命が国土の修理固成する段に、

①故、二柱神、立訓立云多々志 天浮橋而…

故(かれ、二柱の神、天(あめ)の浮橋(うきはし)に立たして

〔全集『古事記』30頁-31頁〕

とあり、天忍穗耳命が天の浮橋で豊葦原之千秋長五百秋之瑞穂国を視た際の記述に、

②於是、天忍穗耳命、於天浮橋多々志 此字以音 而、詔之…

是（ここ）に、天忍穗耳命（あめのおしほみのみこと）、天（あめ）の浮橋（うきはし）にたたして、詔（のりたま）はく、

『古事記』 98頁-99頁

とあり、天津日子番能邇邇芸命が高千穂の久士布流多氣に天降の際の記述に、

③離天之石位、押分天之八重多那 此二字以音 雲而、伊都能知和岐知和岐弓、自伊以下十字以音 於天浮橋、宇岐土摩理、蘇理多々斯弓、自弓以下十一字以音 天降坐于竺紫日向之高千穂之久士布流多氣。

天（あめ）の石位（いはくら）を離（はな）れ、天（あめ）の八重（やえ）のたな雲（ぐも）を押し分けて、いつのちわきちわきて、天（あめ）の浮橋（うきはし）に、うきじまり、そりたたして、竺紫（つくし）の日向（ひむか）の高千穂（たかちほ）の久士布流多氣（くじふるたけ）に天降（あまくだ）り坐（ま）しき。

『古事記』 116頁-117頁

とある。同じく日本書紀の天孫降臨の記述では、

④既而皇孫遊行之状也者、則自穗日二上天浮橋、立於浮渚在平処、立於浮渚在平処、此云羽企爾磨梨陀毘邇而陀陀志。而膺穴之空国自頓丘覓国行去、頓丘、此云毘陀局。覓国、此云矩式磨儀。行去、此云騰褒屢。到於吾田長屋笠狭之碕矣。

既（すで）にして皇孫の遊行（いでま）す状（かたち）は、穗日（くしひ）の二上（ふたかみ）の天浮橋（あまのうきはし）より、浮渚在平処（うきじまりたひら）に立たして、立於浮渚在平処、此には

羽企爾磨梨陀毘邇而陀陀志（うきじまりたひらにたたし）と云ふ。膺穴（そし）の空国（むなくに）を頓丘（ひたを）より覓国（ぐにま）ぎ行去（とほ）り、頓丘、此には毘陀局（ひたを）と云ふ。覓国、此には矩式磨儀（ぐにまぎ）と云ふ。行去、此には騰褒屢（とほる）と云ふ。吾田（あた）の長屋（ながや）の笠狭（かささ）碕（みさき）に到ります。

『神代第九段 全集『日本書紀』① 120頁-121頁

とある。すべて、なぜか天の浮橋に立つ際には、タタスとなつてゐる。

①は天の浮橋から沼矛を垂らしてかき回すのであり、②は天の浮橋から地上を見下ろしている。③古事記天孫降臨の例について、全集『古事記』頭注（117頁）は、「うきじまり」は未詳とし、「そりたたして」は

◇ソルはすつくと高くなるの意か。『新訳華嚴經音義私記』には、「隆起」にソリノボレルの訓がある。

と言ひ、「天の浮橋にすつくとお立ちになつて」と訳す。ソリタタスは「伸び上がつて立つ」の意で、天浮橋にすつくと立つた。これから地上に向かって降りていく発始の姿勢である。

④の神代紀第九段頭注（121頁）は、

◇浮島があり、その平地に立たれて、の意。記には口誦的詞章の「宇岐土摩理うきじまり蘇理多々斯弓そりたたして（すつくと

立たれて」と仮名書きしてある。

と言い、

◎ こういう次第で、そこから皇孫が歩かれる様子といえば、
穗日の二上の天浮橋から、浮島の平らな所に降り立たれ、瘦
せて不毛の国から丘続きに良い国を求めて歩かれ、吾田の長
屋の笠狭の碕にお着きになった。

『全集』日本書紀 ①『訳』

と訳す（「うきじまり」は難しいのであるが、日本書紀のほうは、この全集『日本書紀』の訳「浮島の平らな所」が妥当であると考ええる）。天の浮橋から
浮渚の平な処に着地したのである。

ところで、④では「立」の字を「たらし」と訓んでいる
のであるが、同じ一文の中の「行去」には「騰褒屢 とほ
る」の訓がつけられ、スは訓まれていない（なお、ここで「騰褒
屢 とほる」と訓まれているのであるから、ここは終止形に訓んで、文を切るべき
ところである）。もし、スが敬語の助動詞なり動詞語尾なりで
あるのであれば、「行去」も「とほらす」と訓むであらう。
このことから、スは敬語の助動詞ないし敬語の動詞語尾で
はない、と言うことができる。また、天の浮橋に立つ際に
のみタタスが出てくるのは、この動作に何らかの意味があ
るからであらう。それは、タツではなくタタスであった。
単に立つだけではない、特殊な動作として、タタスなのであ
る。

日本書紀の記述は、この前（118頁・120頁）に、

○于時高皇産靈尊以真床追衾、覆於皇孫天津彦彦火瓊瓊杵尊使
降之。

時に高皇産靈尊、真床追衾を以ちて、皇孫天津彦彦火瓊瓊杵
尊に覆ひて降りまきしむ。

がある。真床追衾にくるまれ降臨するのは、重要な天皇即
位儀礼である。

天の浮橋は、高天原と地上世界との間にかかる橋であり、
そこでは「タタス」ことに大きな意味がこめられる。この
動作は、地上世界に降りるにあたっての儀礼的な動作であ
った、と読み取ることができる。これは、萬葉集の

○高円の 野の上の宮は 荒れにけり 立たしし君の（多
志と伎美能） 御代遠そけば

の「（国）見あるいは行事の儀礼として」立つ」意のタタス
に繋がるものである。〔萬葉二十・4506 大伴宿祢家持〕

③では「天浮橋にすつくと立った。これから地上に向か
って降りていく発始の姿勢である」。④では「天の浮橋か
ら浮渚の平な処に着地した」。このふたつの行為は、体操
選手が鉄棒競技をする始めに一呼吸まっすぐに立ち、終了
した際に一呼吸静止する姿を思い浮かべればよい。他の競
技や日常の動作であるならば、一礼するのにあたる。

【呉床にタタシ】

日本書紀75歌謡の「呉床に立たし」について考える。上に、その意味を「座に就く（腰かける）」とした。「さ猪待つと わが立たせば」のタタスも同じく「腰かける」の意である。古事記2歌謡の「押そぶらひ わが立たせれば 引こづらひ わが立たせれば」は、同じ「わが立たせれば」の形で「立つ」の意であった。「立つ」と「座る」とは「立ちて居て」などと並べられることもあるように、相對する概念である。それがなぜ、あるときには「立つ」の意になり、あるときには「座る」の意になり得るのか。これはちょうど、キコスが記紀では「思う・考える」の意であったものが、萬葉では「言う」の意に転じ、キカス（聞く）と相對したことで、よく似ている。タタスが「腰かける」の意になるのは、その核に「就く」すなわち「発する」の義があつたことによるのである。古事記2歌謡

○…押そぶらひ わが立たせれば（和何多々勢礼婆） 引こづらひ わが立たせれば（和何多々勢礼婆）…

〔記 2 歌謡〕

のタタスも、単純に「立つ」と現代語訳してはならないであらう。これは、求婚の場面であるから、たとい八千矛の神の命の動作が粗暴であり、言葉が乱暴であつたにしても、沼河日売の戸口で礼を尽くそうとは試みているであらう。

【城の上に立たし】

「呉床に立たし」の例は、天皇の動作についてタタスが使われている。ところが、日本書紀101歌謡

○韓国の 城の上に立たし 大葉子は 領布振らす見ゆ（比例 甫羅須弥噲） 難波へ向きて

〔紀101歌謡〕

には大葉子という調吉士（つきのきし）伊企雛（いきな）の妻の行為に「立たし」が使われている。この歌は、日本書紀100歌謡の

○韓国の 城の上に立ちて 大葉子は 領巾振らすも（比例 甫羅須母） 日本へ向きて

〔紀100歌謡〕

をうけて歌われたものであるが、100歌謡は大葉子自身の歌である。この歌では「立たし」ではなく「立ちて」になっているが、「振らす」にスが出てくる。全集『日本書紀』ではスを尊敬の助動詞と考えているのであるが、この歌の頭注には、

◇振ラスモのスは尊敬の助動詞。本文の文脈からみると、大葉子は自敬表現をしている。しかし、大葉子の身分としては不自然なので、もとは大葉子以外の作者を考えるとよく理解できる。

〔全集『日本書紀』②453頁〕

と言う。そうであるとして、101歌謡では「城の上に立たし」となっているところが100歌謡では「城の上に立ちて」となっているのはなぜか。スが敬語であるとするな

らば、100歌謡のほうも「城の上に立たし」とするはずである。「立たし」の스가敬語をあらわすことばではないとすれば、「振らす」のスも敬語ではない。

この大葉子の行動は、八千矛の神の命が沼河日売の戸口にタタスのが儀礼的な動作であったように、ここでも、大葉子は日本に向かって挨拶を送る歌を歌い、その動作に儀礼性があるのである。

以上、記紀のタタスには「呼ばひに就く」「呉床に腰掛ける(着席する)」「(天皇が行事の儀礼として)立つ」「狩に出発する」など、特殊な意味のものがある。すべて、何かの動作に就くものである。このことから、古事記本文および日本書紀本文のタタスはこれから高天原より葦原の瑞穂の国に降りていくにあたって天の浮橋に立つ、ないし、葦原の瑞穂の国に降り立ったことに儀礼的意味をこめて直立した、その動作を言うものであったことがわかる。

「石立たす 少名御神」と「倭なす 大物主」

記紀にスクナビコナノカミが登場する。古事記上巻では、少名毘古那神は、大穴牟遲と共に国土を作り堅め、後に常世国に度った神として描かれている。神代紀第八段一書第六でも、少彦名命として描かれ、大国主神と共に天下(あ

めのした)を経営(つくり、病の療法を定め、虫害・鳥獣の害を除去する呪いの法を定めた。後に常世郷に渡った、と言う。その後オホナムチは、古事記では、倭の三諸山に斎き奉る神とともに国を作り成したと言ひ、日本書紀では、独り、国を造り幸魂奇魂を三諸山に祀った、と言う。

萬葉集に

○大汝 少御神の(大穴道 少御神) 作らしし 妹背の山を
見らくし良しも 〔萬葉 七・1247 羈旅作〕

○大汝 少彦名の(於保奈牟知 須久奈比古奈野) 神代より
言ひ継ぎけらく… 〔萬葉十八・4106 大伴宿祢家持〕
があり、スクナビコナノカミをスクナミカミとも呼んだことがわかる。日本書紀崇神天皇八年の歌に

○此の御酒は わが御酒ならず 倭成す 〔大物主の(椰磨等那
殊 於朋望能農之能) 醸みし神酒 幾久 幾久

があるのに対して、記紀の神功皇后の歌には、
〔紀 15歌謡〕

○この御酒は わが御酒ならず 酒の司(くしのかみ) 常世に
坐す 石立たす 少御神の(伊波多々須 々久那美迦微能)
神寿き 寿き狂ほし 豊寿き 寿き廻ほし(ほきもとほし)
奉り来し御酒ぞ 止さず飲せ ささ 〔記 39歌謡〕
○此の御酒は わが御酒ならず 神酒の司(くしのかみ) 常世
に坐す いはたたす 少御神の(伊破多多須 周玖那弥伽未
能) 豊寿き 寿き廻ほし(ほきもとほし) 神寿き 寿き狂

ほし 献り来し 御酒ぞ あさず飲せ ささ

〔紀 32 歌謡〕

がある。大物主も少名彦の神も、酒の神とされているのは、穀物神であったからである。少彦名命は天下経営の途中で常世郷に行く。日本書紀の、粟茎にのぼり弾かれて常世郷に至ったという伝承は、少彦名命が稲作経営以前の神であったことを示唆する。大己貴命が「倭成す 大物主」であるのに対して少彦名命は「石立たす 少御神」である。大系『古事記 祝詞』(237頁)に、

◇岩石としてお立ちになっている。これはこの国では石像としてお立ちになっているという意であろう。延喜式神名帳、能登国羽咋郡に「大穴持像石(カタイシ)神社」、能登郡に「宿那彦(スクナヒコ)神像石神社」があるのが参考となる。と言い、紀32歌謡の全集『日本書紀 ①』の頭注(449頁)に、

◇『延喜式』神名に「宿那彦すくなびこ神像石神社」(能登国能登郡)とあるように、石の上に立つ神としての信仰があったことの反映。

と言う。ところが、新潮国語辞典では、

◇岩のように永久にお立ちになる。長くおいでになる。

と言い、記39歌謡の全集『古事記』(255頁)の頭注には、
◇岩神として立っていらっしゃる、の意とするのが通説だが、

岩のように永続性をもつ意とも考えられる。

のような考えが示されている。さまざまな解釈があるが、日本の古代信仰では、巖座を神と崇めることが一般に行われていたから、少名彦の神は巖を御神体として祀られていたのである。「倭成す 大物主」に対して「石立たす 少名御神」であるから、「倭成す」と同じく、「石立たす」は枕詞であると言ってよい。「倭成す 大物主」は、大物主が倭の国土経営にかかわったことを言うのに対して、「石立たす 少名御神」は少名御神が古くからの民間信仰の神であったことを伝える。

(七・1247にも「作らしし」が出てくるが、これは「作」一文字を訓んだもので、原の訓はわからない)

ここに「倭成す 大物主」と「石立たす 少御神」とを対比したのであるが、実は、「石立たす 少御神」に對立する神がいまひとつある。「天照らす 大御神」である。記には天照大御神、紀には天照大神として登場する。神代紀第五段に、

○是共生日神。号大日靈貴。大日靈貴、此云於保比屢咩能武智、靈音力丁反。一書云、天照大神。一書云、天照大日靈尊。此子光華明彩、照徹於六合之内。

『日本書紀 ①』34頁-36頁
とあるように、古くはオホヒルメノムチまたアマテラスオ

ホヒルメノミコトと呼ばれていた。

萬葉集では、「天照る」は月を修飾して「天照る 月」(3650・2463・1080)となり、「天照るや」は日を修飾して「天照るや 日」(3886)となる。「天照らす」は「日女の命」「神」を修飾して「天照らす 日女の命」(67)「天照らす 神の御代」(4125)などの例がある。

○…あしひきの この片山の もむ楡を 五百枝剥ぎ垂れ 天照るや 日の異に干し(天光夜 日乃異尔干) さひづるや 韓白に掲き 庭に立つ 手白に掲き おしてるや 難波の小江の 初垂を 辛く垂れ来て…

〔萬葉十六・3886 乞食者の詠二首〕

○…天照らす 日女の命 一に云ふ、「さしあがる 日女の命」

(天照 日女之命 一云、指上 日女之命) 天をば 知らしめ
すと… 〔萬葉 二・167 柿本朝臣人麻呂〕

○天照らす 神の御代より(安麻泥良須 可未能御代欲里)：

〔萬葉十九・4125 大伴宿禰家持〕

「天照るや」は「日」に懸かる枕詞であり、「天照らす」は「日女の命」「神」に懸かる。

全集『古事記』の「天照大御神」の頭注には、

◇天照大御神は、「天照」がアマ(天)＋テラス(照る＋尊敬の
ス)で、天に照り輝きたまうような、という称辞となる。
「大御神」の「大御」も称辞だから、この神はすべて称辞だ
けからなる。太陽神という実質は名義のなかには表示されて

いない。むしろ、実質を超越した、至高性をもつ存在として
示されている。 〔『古事記』52頁〕

と言うのであるが、全集『日本書紀』

○於是共生日神。号大日靈貴。大日靈貴、此云於保比屢咩能武智。靈
音力丁反。一書云、天照大神。一書云、天照大日靈尊。

の「天照大神」の頭注に、

◇天に照り輝く大御神の意。 〔『日本書紀』① 35頁〕

「天照大日靈尊」の頭注に、

◇「天照」は大日靈尊の称辞として冠せられた名である。

〔『日本書紀』① 35頁〕

と言う。もともとは「天照らす」は「日靈」に懸かるもの
であり、「天に遍く輝く 日女の命」であった。「天照日靈
尊」「天照大日靈尊」を経過して「天照大神」に熟してい
ったのである。

「大御神」が成立するとき、一方に「少御神」があり、
「天照らす 日女の神」を「天照大御神」「天照大神」と
して記紀神話が形づくられていくとき、スクナヒコナノカ
ミも「石立たす 少御神」という呼び名に熟して対比した
ものであろう。

石立たす	少御神	：	大地に根ざす	：	土着神	：	粟(焼畑農業)
倭成す	大物主	：	国造り	：	国つ神	：	魚
天照らす	大御神	：	国土経営	：	天つ神	：	天神
							五穀耕作

アマテラス大御神が「天に遍く輝く神」であるとき、イハタス少御神は「大地にしつかりと根をはった神」である。イハタスは、石を御神体とする土着の神の謂いである。

〔宿那彦すくなびこ神像石神社〕という神社は、記紀神話をもとに、後に形成された神社であろう。

【ミタシノ（島）】

萬葉集にミタシノの用例が4例（二・178、180、181、188）、ミタシスの用例が1例（五・869）ある。

○み立たしの（御立為之） 島を見る時 にはたづみ 流るる
涙 止めそかねつる

○み立たしの（御立為之） 島をも家と 住む鳥も 荒びな行

きそ 年かはるまで

○み立たしの（御立為之） 島の荒磯を 今みれば 生ひざり

し草 生ひにけるかも

○朝ぐもり 日の入りに行けば み立たしの（御立之） 島に下

り居て 嘆きつるかも

○足日女 神の命の 魚釣らすと み立たしせりし（美多々志

世利斯） 石を誰見き

一に云ふ、「鮎釣ると」

〔萬葉 五・869 山上憶良〕

卷二の178・180・181・188は、「皇子尊宮
舎人等慟傷作歌二十三首」のもので、「み立たしの」を新

大系は「皇子が立つておられた」、集成は「皇子がよくお立ちになった」と訳す。全集は「皇子のお気に入り」と訳すが、178注に「生前よく佇んでいらした」と注する。これは、皇子尊（日並皇子）が今は亡いのであるから、過去のできごとである。ゆえに、「み立たしの」は過去のこゝとして訳して、「立つておられた」「お立ちになった」とする、ということである。

卷五・869の歌の「み立たしせりし」は一般に「お立ちになった」（新大系（全集）と訳されている。こちらは、過去の助動詞シ（キ）があるから過去のできごとであることがわかる。であれば、178・180・181・188の歌の「み立たしの」は「お立ちの」となるはずである。これは、

○み佩かしを（御佩乎） 劍の池の 蓮葉に…

〔萬葉十三・3289 相聞〕

「ミハカシヲ 劍」と同じく、「ミタシノ」を「島」の枕詞として歌ったものではないか。

記紀の立タスと萬葉の立タス

古い時代のスは、発動・現在の動作を表わす。このスは、「為す」「越す」「干す」など動作性動詞の語尾であるスと根を同じくするものである。

ところで、萬葉集に「松浦河に遊びし序」があり、その歌に、

○松浦川 川の瀬光り 鮎釣ると 立たせる妹が（多し勢流伊

毛河） 裳の裾濡れぬ

〔萬葉 五・855 大伴旅人か〕

○松浦なる 玉島川に 鮎釣ると 立たせる児らが（多し世流

古良河） 家路知らずも

〔萬葉 五・856 大伴旅人か〕

とある。このタタスは大葉子のタタスと同じように見えるが、山上憶良の歌に、

○松浦がた 佐用姫の児が 領巾振りし 山の名のみや 聞き

つつ居らむ

〔萬葉 五・868 山上憶良〕

があつて、佐用姫が別れ行く夫に「領巾を振る」さまが描かれる。この場合は、「振ラス」ではない。また、同じときの歌に、

○足日女 神の命の 魚釣らすと（奈都良須等） み立たしせ

りし（美多々志世利斯） 石を誰見き 一に云ふ、「鮎釣ると」

〔萬葉 五・869 山上憶良〕

がある。このスには動作を起こすという臨場感はない。山上憶良のスの用法は、親愛をあらわすス、あるいは語調を整えるための語のようである。すなわち、少なくとも憶良の時代には、スは親愛をあらわす語、あるいは語調を整え

るための語と、認識されていた、と考えることができる。また、巻十三・3299の歌に、

○見渡しに 妹らは立たし（妹等者立志） この方に 吾は立

ちて（吾者立而） 思ふ空 安けなくに 嘆く空 安けなく

に さ丹塗りの 小舟もがも 玉巻きの 小楫もがも 漕ぎ

渡りつつも 相言ふ妻を

或る本の歌の頭句に云く、「こもりくの 泊瀬の川の をち方に 妹

らは立たし（伊母良波多志） この方に われは立ちて（和礼波多

知弓）」といふ。

〔萬葉十三・3299〕

があつて、「妹らは立たし」と「われは立ちて」とが対比されている。この歌には山上憶良の七夕歌、巻八・1520の表現「思ふ空 安けなくに 嘆く空 安けなくに」「さ丹塗りの 小舟もがも 玉巻きの ま櫂もがも」

○彦星は 織女と 天地の 別れし時ゆ いなむしろ 川に向

き立ち 思ふそら 安けなくに 嘆くそら 安けなくに 青

波に 望みは絶えぬ 白雲に 涙は尽きぬ かくのみや 息

づき居らむ かくのみや 恋ひつつあらむ さ丹塗りの 小

舟もがも 玉巻きの ま櫂もがも 一に云ふ、「小櫂もがも」

朝なぎに いかき渡り 夕潮に 一に云ふ、「夕にも」 い漕ぎ

渡り ひさかたの 天の川原に 天飛ぶや 領巾片敷き ま

玉手の 玉手さし交へ あまた夜も 寝ねてしかも 一に云ふ、

「眠もさ寝てしか」 秋にあらずとも 一に云ふ、「秋待たずとも」

〔萬葉 八・1520 山上憶良〕

が使用されていて、憶良の歌から取り入れたものと見られる。

したがって、成立は憶良の時代より後と考えられる。

「われは立ちて」に対して「妹らは立たし」であるから、

この「立たし」のスは、親愛の語であるか、あるいは語調を整える語と考えてよい。すでに、記紀の動作性の意味は失われ、スは親愛の語であるか、あるいは語調を整える語と意識されていた。

拙稿「キカス・キコス キコシラス・キコシメス・シラシメス」(京都語文 20号)において、キコスが記紀の時代と萬葉の時代とで、意味が変化していたことを見た。タタスもまた、記紀の時代と萬葉の時代とでは意味を異にしていたのである。

三重ノ子ガ捧ガセル瑞玉盞

以上のことから、スは動詞の動作性をあらわす語尾ではないか、ということとで、他の歌を見る。

古事記の、三重の采女の歌った歌

○…下枝の 枝の末葉は 在り衣の 三重の子が 捧がせる
(佐々賀世流) 瑞玉盞に 浮きし脂 落ちなづさひ 水こ
をろこをろに 是しも あやに畏し 高光る 日の御子 事
の 語り言も 是をば

〔記 99歌謡〕

の「捧がせる」について、新編日本古典文学全集『古事

記』では、頭注に、

◇「捧がせる」の「せ」は、尊敬の「す」。歌い手である三重の采女が自分のことを「三重の子」と客観的に捉えたために、尊敬表現になったもの。『書紀』欽明二十三年七月にも、大葉子自身が「大葉子は 領巾振らすも 日本へ向きて」と歌った例がある。

と言う。が、客観的に捉えてであれ、天皇の前で、一采女の行動に敬語を用いるなどということはない。このスを動詞の現在の動作性をあらわす語尾と考えれば、

◎…在り衣の三重の采女が 今まさに捧げている瑞玉盞に 浮いていた脂が落ちよどんで漂っているように(かき鳴らしてできた国土のように) 水こおろこおろに下枝の枝の末の葉が浮いています…

ということとで、自然に解釈できる。

大葉子ハ領巾振ラスモ

また、日本書紀の、調吉士伊企儼の妻大葉子が歌った歌

○韓国の 城の上に立ちて 大葉子は 領巾振らすも(比例甫囉須母) 日本に向きて

の新編日本古典文学全集『日本書紀②』の注には、

◇振ラスモのスは尊敬の助動詞。本文の文脈から見ると、大葉子は自敬表現をしている。しかし、大葉子の身分としては不自然なので、もとは大葉子以外の作者を考えるとよく理解で

きる。

とあり、これも都合により解釈を変えていて疑問である。
スを動詞の現在の動作性をあらわす語尾と考えれば、

◎韓国の城の上に立つて、大葉子は今領巾を振っているよ、日本に向かつて。

ということになる。

六注

5 日本書紀75歌謡に相当するのは、古事記では96歌謡である。
この歌の前に、

○即、幸阿岐豆野而、御鴛之時、天皇、坐御呉床。

〔雄略記344頁〕

即ち、阿岐豆野に幸して、御鴛せし時に、天皇、御呉床に坐しき。

とある。

また、その前の「幸行吉野之時」の記述の中に、

○立大御呉床而、坐其御呉床、彈御琴、令為儻其嬢子。

〔雄略記344頁〕

とあり、全集では、

大御呉床を立てて、其の御呉床に坐して、御琴を弾きて、
其の嬢子に儻を為しめき。

と訓じている(345頁)。紀75歌謡の「呉床に立たし」には
へ一本に、「立たし」を以ちて「坐し」に易ふの注記があるよう

に、ここは「坐し」であって、「立つ」は雄略記のように、「呉床
を立て」のように用いるものであつたらう。

七 菜摘ます児

以下の歌も、同様にして「まさにししている」「ちょうど
ど」で訳す。

古事記42歌謡では、

○…すくすくと わがいませばや (和賀伊麻勢婆夜) 木幡の

道に 逢はしし嬢子 (阿波志斯衰登売)

…眉画き こに画き垂れ 逢はしし女 (阿波志斯衰美那) …

〔記 42歌謡〕

のように、応神天皇が自分に敬語を用いて「わがいませば
や」と言い、また相手の矢河枝比売にスを用いてもいる。

これは、

◎…わたくしが、ずんずんと歩いていくと、木幡の道で、ちよ
うど逢った乙女

…眉を描き、こんなふう引き垂らし、ちょうど逢った乙女

…

と訳すことができる。(「こに描き垂れ」の訳は、全集の説に拠る)

同様にして、

○…前妻が 看乞はさば (那許波佐婆) …後妻が 看乞はさば
(那許波佐婆) …

〔記 9歌謡〕

○…前妻が 看乞はさは (那居波佐麼) …後妻が 看乞はさは (那居波佐麼) …

〔紀 7 歌謡〕

は、

○…前妻が看を欲しいと言うその時には、…後妻が看を欲しいと言うその時には、…

と訳せる。

○…高光る 日の御子に 豊御酒 献らせ (多弓麻都良勢) …

〔記 100 歌謡〕

も、

○…高光る 日の皇子に さあ、豊御酒を差し上げなさい。…

である。

○水そそく 臣の嬢子 秀罇取らすも (本陀理登良須母) 秀

罇取り 堅く取らせ (加多久斗良勢) 下堅く 弥堅く取ら

せ (夜賀多久斗良勢) 秀罇取らす子 (本陀理斗良須古)

〔記 102 歌謡〕

も、

○(水そそく) 臣の乙女はちようど秀罇を手を取っているよ。

秀罇をしつかりお持ちなさい。秀罇をささえて、しつかりお持ちなさい。いま秀罇を手を取っている乙女よ。

と訳してよい。この歌は、後に「此者、宇岐歌也」と記されている。また、琴歌譜にも

○水灌く 臣の少女 秀罇執り (保陀理刀利) 一説に云ふ「と

らさね」一説云刀良左称 下堅く 弥堅く執れ 秀罇執らす子 (保太利刀良須古)

〔大系本『古代歌謡集』「琴歌譜」盡歌うきうた〕

とある。注記にも雄略天皇の歌とあるが、天皇の作ではないのであろう。さて、これは、あの萬葉集卷第一・1の歌の作者とされている雄略天皇の歌である。萬葉集卷第一・1の歌もまた、雄略天皇の歌ではないと言ってよいのであろう。これが雄略天皇の歌でないとと言っても、スの訳に変わりはない。

○籠も良い籠を持ち、へらも良いへらを持つてこの岡で今菜を摘んでいる乙女よ。家を教えてください。さあ、今名前を教えてください。大和の国は、すべてわたくしが統治しているのです。この国は、すべてわたくしが支配しているのです。わたくしこそ名告りましょう。家をも名をも。あなたも、名告ってください。⁽⁶⁾

「名を告る」「菜摘む」などのことばを含んだ以下の歌も同じである。

○みさご居る 磯廻に生ふる なのりその 名は告らしてよ (名者告志豆余) 親は知るとも

〔萬葉 三・362 雑歌 山部宿祢赤人〕

○みさご居る 荒磯に生ふる なのりその よし名は告らせ (吉名者告世) 親は知るとも

〔萬葉 三・363 雜歌 或本歌曰〕

○：娘子らが 春菜摘ますと（春菜都麻須等） 紅の 赤裳の

裾の 春雨に にほひひづちて 通ふらむ 時の盛りを：

〔萬葉十七・3969 大伴宿禰家持〕

「さあ、名を名告ってください」「今、春菜を摘もうと」である。

以上、述べてきたことは、

キコス・メス・オモホスなど、オ段音に接するスは敬語

ア段音に接するス、およびナス、ケスなどのスは動詞の動作性（まさにくする）をあらわす動詞語尾である。

七注

6 萬葉集卷第一・1

○籠もよ み籠持ち ふくしもよ みぶくし持ち この岡に 菜摘ます兒 家告らな 名告らさね そらみつ 大和の国は おしなべて 吾こそ居れ しきなべて 吾こそいませ 我こそば 告らめ 家をも名をも

「我こそば 告らめ 家をも名をも」は、逆接である。「わたくしこそ名も家も告げるけれども、あなたの名も家も聞きたい」と言うのである。

ハ スの意味

〈四 スを用いるものと用いないもの〉に掲げた古事記96歌謡は、

○：やすみしし わが大君の 猪鹿待つと 呉床に坐し〔阿具良爾伊麻志〕 白袴の 袖着そなふ〔蘇弓岐蘇那布〕 手腓に：：〔記 96歌謡〕

のように、「坐し」が尊敬であるにもかかわらず、「着そなふ」は尊敬になっていない。古事記では尊敬の語は、ひとつの歌の中でかならずしも一貫して用いられるとは限らない。

ところが、古事記96歌謡と同じ内容を詠った歌である日本書紀75歌謡では、

○倭の 鳴武羅の岳に 鹿猪伏すと 誰かこの事 大前に奏す一本に、「大前に奏す」を以ちて「大君に奏す」に易ふ 大君は 其ことを聞かして（賊捩鳴枳舸斯題） 玉纏の 胡床に立たし〔阿娑羅備陀陀伺〕 一本に、「立たし」を以ちて「坐し」に易ふ 倭文纏の 胡床に立たし〔阿娑羅備陀陀伺〕 鹿猪待つと わが いませば（倭我伊麻西麼） さ猪待つと わが立たせば（倭我陀陀西麼） 手腓に 虻搔きつきつ その虻を 蜻蛉早や 嚙ひ 昆虫も 大君にまつらふ 汝が形は置かむ 蜻蛉島倭一本に、「昆虫も」より以下を以ちて「かくのごと 名に負はむと」そらみつ 倭国を 蜻蛉といふ」に易ふ。

〔紀 75歌謡〕

のように、古事記の

「猪鹿待つと 呉床に坐し」

が

「玉纏の 胡床に立たし 一本に、「立たし」を以ちて「坐し」に易ふ

倭文纏の 胡床に立たし 鹿猪待つと わがいませば さ猪待

つと わが立たせば」

となり、古事記では「呉床に坐す」という動作であったも

のが、「玉纏の 胡床に立たし 一本に、「立たし」を以ちて「坐し」

に易ふ 倭文纏の 胡床に立たし」となつて、タタスは

「座に就く」の意になっている。さらに、その後の

「猪鹿待つと」

の場合には、

「鹿猪待つと わがいませば さ猪待つと わが立たせば」

立ったり座ったりという動作をあらわすものになっている。

使用の近い「胡床に立たし」と「さ猪待つと わが立たせ

ば」において、一方は「座に就く」の意であり、一方は

「立つ」という動作の意であるのは、都合が悪い。そのゆ

えに、へ一本に、「立たし」を以ちて「坐し」に易ふとい

う一本の記述が重要な役割を果たすことになる。

〈記紀歌謡のタタス〉(208頁)に述べたように、「立つ」

は「座に就く」の意と考えられるが、また、雄略記の「幸

行吉野宮之時」の記述には、

○立大御呉床而、坐其御呉床、弹御琴、令為儻其嬢子。

大御呉床を立てて、其の御呉床に坐して、御琴を弾きて、其

の嬢子に儻を為しめき。『古事記』 344頁-345頁

とある。呉床の場合、「立つ」は雄略記の「呉床を立て」

のように用いるものであつて、日本書紀75歌謡の「呉床

に立たし」は、元は、古事記にもあるように「坐し」であ

つたらう。しかしながら、本文では「立たし」の記述なの

であり、日本書紀75歌謡では、一貫してイマスないしス

が用いられることとなる。日本書紀の編纂された時には、

すでにタタスは特別な動作をあらわす語ではなく、また、

スも動作性の意味をもつたことばではなくなつていたため

に、このような歌の改変が行なわれたものであろう。そし

て、イマスと同列に用いられるスとは、やはり、敬語性の

ことばであらう。古事記では尊敬の語は、ひとつの歌の中

でかならずしも一貫して用いられるとは限らなかった。そ

こで、イマスと音の似たスを敬語と扱つて、古事記の不整

合を日本書紀であらためたものである。古事記の「猪鹿待

つと 呉床に坐し」は

◎猪や鹿を待つて呉床に座つておられると

であり、日本書紀の「玉纏の 胡床に立たし 一本に、「立た

し」を以ちて「坐し」に易ふ 倭文纏の 胡床に立たし 鹿猪待つ

と わがいませば さ猪待つと わが立たせば」は

◎玉を飾った胡床にお就きになり（一本に、「お就きになって」を以て「坐し」に易えている）倭文纏の胡床にお就きになり 鹿や猪を待つて 私がいらつしやると 猪を待つて 私が立つていらつしやると

ということになる。

今一度述べれば、古事記のスは動作・作用が起きることを示す動詞語尾である。が、古事記2歌謡でもキコスとキカスが同じ扱いとなつてゐる。そして、日本書紀75歌謡では、スが敬語をあらわすものとして使用されている。

〈三 萬葉集の「所」字の用法〉に述べた、萬葉集で「ス」と訓み得るものを「所」字であらわしているものがあるように、オ段音にスが接する形の「きこす」などにひかれて「きかす」などのスも敬語と考えられるようになっていった。そして、萬葉集では、スは親愛をあらわすことばとして使用されたり、語調を整えることばとして使用されるようになっていった。巻一・1のようなスは、古い用法が残つたものである。

九 スの性格

「葉摘ます兒」などのスは、現存をあらわすアリと同じく古い時代に活躍した動詞語尾であり、すでに古事記のころでさえ古語になつてゐたことばである。

ツム（摘）＋ス
がツマスの形をとるのに対して、

キル（着）＋ス

がケス（エ段音接続）の形をとることは、上代の現存をあらわすアリがサク（咲）を承接する場合には

サク（咲）＋アリ↓サケリ

となる一方で、キル（着）を承接する場合には、

キル（着）＋アリ↓ケリ

の形（エ段音接続）になることを思い起こさせる。「ケ」は着ルの活用にはない形である。

このアリもスも上代に活躍しながら、中古には衰えていった語である（アリはリの形で、限定された場で存続の助動詞としてわずかに活動が続ける）。

アリには、

○潮瀬の 波折リを見れば 遊び来る 鮪が端手に 妻立てり
見ゆ（都麻多呂理美由） [記108歌謡]

○潮瀬の 波折リを見れば 泳びくる 鮪が鰭手に 妻立てり
見ゆ（都麻陀氏理弥喻） 一本、以之哀世易弥儺斗。 [紀 87歌謡]

のように、「ゝリ 見ユ」の形のものがある。これは、萬葉集にも

○久方の 月は照りたり 暇なく 海人の漁火は ともしあへ

り見ゆ（等毛之安敵里見由）

〔萬葉十五・3672〕

などの形で出てくる。また、

○わが背子を あが松原よ 見渡せば 海人少女ども 玉藻刈

る見ゆ（多麻藻可流美由）

〔萬葉十七・3890〕

○白妙の 衣の袖を まくらがよ 海人漕ぎ来見ゆ（安麻許伎

久見由）

波立つなゆめ

〔萬葉十四・3449〕

のように「動詞終止形 見ユ」の形で、「リハアリ」はとくに分出しないものもある。すなわち、「リハアリ」を分出するものと動詞のままのものと等価であつて、これらの意味は「リハアリ」を分出することによつてとくに変わる。また、これらの歌は、萬葉集の歌に特徴的な「…見れば見ゆ」の形でものごとに出会した感動を歌う形式である。3672歌・3449歌のように「…見れば」は表出されないこともあり、また、

○田子の浦ゆ うち出でて見れば ま白にそ 富士の高嶺に

雪は降りける

〔萬葉 三・318 山部宿禰赤人〕

のように、「見ゆ」が表出されないこともある。詮じつめれば「ゝ」に出会したことこそが必須であつて、「ゝ」に出会したこと「見ゆ」は必ずしも表出しなくともよいのであつて、萬葉集の自然詠はおおむねその形になつてもある。すなわち、「へS-P」見ゆ」は、「へS-P」。それが見え

る。」の意であつて、「へS-P」見ユ」は、一旦は対象のあり様を「S-P」と叙述し、ひるがえつて、言語主体者自身が主体的立場に立つて、観入的に「それが見える。」と言表するものであり、「リハアリ」は「S-P」を

「S-P」アリ（が在る）

と判断して、さらに客体化するに向かう働きをにない、それを言表する語である（「ガ在ル」が内的思念の中で存在へ判断をあらわすという時、それは「デアル」に転換する）。「リハアリ」は「現存」をあらわすが、その「現存」は「S-P」の事実の存在・現存（↓判断）ということでもある。⁽⁷⁾

これに似た形のものガスにもある。調の吉士伊企儼（うきのきしいきな）の妻大葉子（おおはこ）が歌つた歌

○韓国の 城の上に立ちて 大葉子は 領巾振らすも（於譜磨故幡 比礼甫囉須母） 日本へ向きて 〔紀100歌謡〕

に、ある人が和した歌

○韓国の 城の上に立たし 大葉子は 領巾振らす見ゆ（於譜磨故幡 比礼甫囉須彌喻） 難波へ向きて 〔紀101歌謡〕

の「大葉子は領巾振らす」見ゆ」である。「ゝり見ユ」が現存を表わすのに対して「ゝス見ユ」はその動作に重点が置かれた表現である。

◎（100歌謡） 韓国の城の上に立つて、大葉子は今領巾を振っています。日本に向かつて。

◎（101歌謡） 韓国の城の上に今立つて、大葉子が今まさに領巾を振っているのが見える。難波に向かつて。

ということである。スは動詞の動作的意味をひきだすことばなのである。

100歌謡は大葉子の歌であるから、城の上に立つて領巾を振りながら歌っているのであり、101歌謡のほうはそれを外から見て歌っている歌である。それゆえ、101歌謡のほうは「立っている」ことも現在のありさまとして歌われ、「立たし」となるのである。

また、上に

○わが背子を あが松原よ 見渡せば 海人少女ども 玉藻刈る見ゆ（多麻藻可流美由）
〔萬葉十七・3890〕

○白妙の 衣の袖を まくらがよ 海人漕ぎ来見ゆ（安麻許伎久見由） 波立つなゆめ
〔萬葉十四・3449〕

のように「動詞終止形 見ユ」の形で、「リハアリ」はとくに分出しないものもある。すなわち、「リハアリ」を分出するものと動詞のままのものは等価であって、これらの意味は「リハアリ」を分出することによってとくに変わりはなく、〈SIP〉の現存性がよりはっきりするものである。

と述べた。スについても、古事記の

○たまきはる 内の朝臣 汝こそは 世の長人 そらみつ 倭

の国に 雁卵生と聞_レくや（加理古牟登岐久夜）

〔記 71歌謡〕

と、日本書紀の

○たまきはる 内の朝臣 汝こそは 世の遠人 汝こそは 国の長人 秋津島 倭の国に 雁産むと 汝は聞_レかすや（難波

企箇輪椰）

〔紀 62歌謡〕

をくらべると、古事記71歌謡に「聞_レくや」とあるものが、日本書紀62歌謡では「聞_レかすや」となっている。「リハアリ」の場合と同様、「スを分出するものと動詞のままのものは等価であって、これらの意味はスを分出することによってとくに変わりはなく。動詞の動作的性がよりはっきりする」と言うことができる。

〈五 上位者から下位者に対してスを用いている場合〉のヘカカスとキコスについて、古事記2歌謡のキカス・キコスと日本書紀96歌謡のキクについて、

○八千矛の 神の命は：賢し女を 有りと聞_レかして（阿理登岐迦志弓） 麗し女を 有るときこして（阿理登岐許志弓）：

〔記 2歌謡〕

○八洲国 妻枕きかねて 春日の 春日の国に 麗し女を 有りと聞_レきて（阿咧等枳枳底） 宜し女を 有りと聞_レきて（阿咧等枳枳底）：

〔紀 96歌謡〕

古事記2歌謡の「聞_レかして」をもとにして日本書紀96歌

謡の「聞きて」に改変したものである、と述べた。ここに、さらに、聞クと聞カスとは等価であつて、これらの意味はスを分出することによつてとくに変わりはない。動詞の動作性がよりはつきりする、とつけ加えることができる。

以上述べたように、スは動詞の動作性をあらわす。ちょうど現存のアリが存在を明確に示したように、スは動詞の動作性を明確にする。

このようなスは、本来、リと接して用いられうる性格のものではない。しかるに、リが現存の意味から存続の意味に変化し、タリと交錯して状態の意味になうようになつていったのと同じく、スもまた、本来の意味を忘れ、単なる動詞語尾と見做されるようになったとき、リと接して

○ 沖つ波 来寄する荒磯を しきたへの 枕とまきて 寝せる
君かも（奈世流君香聞）

〔萬葉 二・ 222 柿本朝臣人麻呂〕

のように、動作ではなく状態をあらわす動詞の語尾として用いられるようになる。それでも、「まさに横たわつてゐる」というように、現在目のあたりにしたできごとの意味はとどめている。